

菩薩及び比丘、優婆塞は、皆これである。——得大勢至よ、『法華經』

の功德は、實に斯くの如く偉大なるものである。此の所謂常不輕菩薩とは、畢竟何を意味して居るぞといはゞ、廣く言へば一切の衆生は悉く佛性あり、法華一乘の道を離れず、狭くいへば、佛の説を聞ける、四部の弟子は、小乗であれば、回小向大し大乘であれば開三顯一して、皆悉く成佛すべきことを警覺し、宣言するところの人である。然るに此の警覺宣言が、却つて他の嘲笑罵詈の種となり、排撃迫害の原因となる。しかもなほ此の嘲笑罵詈、排撃迫害の下にあつても、毫も怒らず、悲ます、失望せず、どこどこまでも、『我汝等を輕んぜず、汝等必ず當來成佛すべければなり』と、強えて證言し、押して斷言して居るのは何であるか。『法華』の行者は、如何なる罵詈迫害の下にも、斷じて其の宣傳弘布を中止すべからざることを示して居るのである。日蓮上人が、此の一品と勸持

「過去不輕品」云々は「佛心」の御抄なり。抄に「佛心」の御抄なり。抄に「佛心」の御抄なり。抄に「佛心」の御抄なり。

品とは、表裏をなすものだと言はれたのは即ちこゝであつて、「勸持品」は、持經者が迫害を受けてる現在について言つたもので、「不輕品」は、過去の事實に寄せて迫害を説いたものである。故に若し日蓮上人が受けた迫害で言へば、これは勸持品の聖言に一致して居るのである。然し此の勸持品の通りにして一生を終つた上人の事蹟は、之を未來から回想したならば、上人の行動は、取りも直さず、「不輕品」其のものである。上人が、「過去不輕品今勸持品今勸持品未來可爲不輕品其時日蓮即可爲不輕菩薩」と言はれてあるのは尤もである。現在の勸持品を身に行つて居るのは、所謂不輕の行であるからである。「勸持品」と「不輕品」とは、互に表裏をなして居るといふのは、即ちこゝである。

日蓮上人が、其の末法弘經の手段を逆化拆伏と定めたのは、此の「不輕品」に基いて居るのであるから、此の一品は、日蓮宗に取つては、

攝受折伏の二
語を並べて、
衆生教化の二
方と明し、
法と明し、
經を本とす。

法華物語

一六

實に輕からざるものである。佛教の弘布には、凡そ拆伏、攝受の二
大門がある。攝受門は、積極的に、相手に眞理を理解せしむること
で、拆伏門は、消極的に、相手の思想を打破することである。日蓮
上人は、此の二大門の中に於て、特に拆伏門を以て、末法佛教の方
法と定められたのである。これは、不輕菩薩が、有らゆる惡口罵詈
凌辱迫害の下にあつても、平然として、どこくまでも、我、汝等
を輕んぜずと繰り返したやり方なので、打擲されんとすれば飛び除
いては我、汝等を輕んぜずとやり通す、これは末法弘經の模範を示
したもので、これでなければ『法華』の下種は出來ない。日蓮上人は、
此の不輕菩薩の態度に感發せられ、所謂勸持品の迫害を甘受し、平
然として、有らゆる反抗と戦ひ、否、寧ろ反抗を激成し、之に向つ
て、『法華』二乗、事の妙法を叫んだのは、彼等をして、之を縁として
『法華』圓融の大海に流入せしめんとする手段である。教へて導かず、

激して之を引くから、名けて之を逆化といふのであつて、恰も大人
なれば勸めて施し得べき治療も、小兒は捕へて施すより致し方がな
い様なもので、強いて『法華』下種をなす手段であるから、之を強盛
の下種といふのである。

抑も此の品に所謂威音王如來空中の聲とは何であるか。これ眞理の
聲である、天地萬有、皆道を離れず、森羅の現象、直ちに久遠の佛
なりと宣する自然の聲である。不輕菩薩は、一切衆生皆佛であると
いふ道理を見て、四衆に此の道を説き終り、なほ自然の聲に、久遠
實成の佛を實證し、自然の上、事實の上に古佛の活現を見得たので
ある。彼は威音王佛の説法を、其滅後に、忽然として空中より發す
る聲に聞き、之を證見し得たのである。そうして此の證見し得たと
ころを説いて、有らゆる佛陀の下に働いた不輕は、やがて一たび不
輕を輕賤、罵詈、迫害した増上慢の徒の來つて、其教化を受くる事

實を見た。これは何であるかといへば、其の輕賤、罵詈、迫害が、却つて『法華』の眞理を聞くべき因縁を結んだので、不知不識の間に、不輕の下種を受け、逆化を蒙つて居たのである。これが日蓮上人の所謂強盛の下種、拆伏逆化なるもの、基く所である。佛は、其の例として、跋陀婆羅等のの人々を擧げられて居るのは、恐らくは、此の人々は、最初佛陀を罵詈輕賤し、後に佛に歸せしものであらうと思ふ。跋陀婆羅等に就いて、詳細なることはわからない。之を要するに、『法華』を護持弘通する功德の廣大なるは言ふまでもないが、之を誹謗罵詈するすらも、なほ成佛の結縁となるといふことを述べたのが、本品の主意で、即ち『法華』の護持流通と誹謗迫害と二者を對照して、罪福二つながら功德を受くることを示し、隨つて像末に、『法華』を弘通するには、自ら逆縁を結ばしむるを一つの手段とする趣きを示したものと見られるのである。

神力品第二十一

囑累品第二十二

神力は奇蹟の
意と見るべし。

佛に二十八天
部に二十八天
を別するは欲
大別すれば欲
界天は色界天
無色界天は色
界天の中にあ
り。

これから、釋尊は、地涌の菩薩に對し、此の『法華經』の宣布を托せんとするに當り、先づ種々の不思議を現じ給ふことを説く、これが即ち神力品である。古來の學者は、此の如來の現じ給ふ神力に十種ありと解釋し、十種神力と呼ぶのである。佛既に流通弘布の功德を説き終りしかば、地涌の菩薩は、皆各合掌して佛の尊顔を瞻仰して、佛滅後、必ず佛勅に隨ひ、此の經を護持して佛の尊顔を瞻仰して、佛に白す。こゝに於て、佛は、大神力を現じ、先づ廣長の舌を出して、其の舌が、天上界の梵天まで達する、これ第一神力である。印度の人は、舌が長大であるのを、福相と考へ、これは過去に於て、不妄語のためを得た果報だといひ、大に之を尊ん

だものと見へる。故に佛が眞實にして疑ふべからざることを證言する場合には、廣長の舌相を出すといふことが、諸經に出て居るのである。近くは『阿彌陀經』に、此の經文の偽りなきを證せんとして、東西南北上下六方の諸佛が、各廣長の舌相を出すといふ有名な六方段といふ一段があつて、其の文には、「如是等恒河沙數諸佛各於其國出廣長舌相遍覆三千大千世界說誠實言云々」とある。此等は今の文と同じく、佛の舌相の廣長なることを以て、佛言の眞實不虛を表すものである。されば今此の第一神力を以て先づこれまで説き來つた佛言の偽りなきを示したのである。次に全身の毛孔より光明を放射して遍く十方世界を照す、之を第二神力とする。光明は智慧を表すものであることは、序品に於て述べた如くであつて、今最後に佛の光明を放ち給ふことは、佛智の究竟し、圓滿せることを示すのである。此の舌相と光明との二神力を現じ給ふや、來集分身の衆寶樹

下の諸佛も同じく舌相と光明との二神力を現する、されば釋迦と分身諸佛との同體同用の妙を表するものである。斯くて佛は舌相を攝めて一時に聲歎すといふから、オホンと一つ、せきばらひをせられたのである。そうして指を以てパチリと音を出された、即ち彈指せられたのである。此の聲歎を第三神力とし、彈指を第四神力とする。蓋し聲歎、彈指は、共に他に聲戒を與へ、注意を促す時の行動である。時に聲歎と彈指の音が十方の諸佛の世界にまで鳴り響き、地、轟然としてこゝに六種の震動を現じた、此の地動を第五神力とする。されば十方諸佛世界の衆生等は、遙に此の娑婆世界に於て、釋迦多寶の二佛、寶塔の中に在し、大衆の之を圍繞せる實状を見ることを得た、これ第六神力である。此の時、諸の天人等、空中より高聲に、娑婆に於て、釋尊が菩薩衆のために、『法華經』を説き給ふよし、並びに此の衆生等の隨喜供養すべきよしを唱ふ。これ第七神力であ

南無(南無)は南無(南無)に
歸す、佛心を奉
り、佛の意に
歸す、佛心を奉
り、佛の意に

る。こゝに於て、之を聞いた衆生等は、皆娑婆世界に向ひ、合掌して、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛と口々に稱へる。これ第八神力である。斯くて、此等の衆生は、一同に種々の華香、瓔珞、旛蓋其の他種々の寶物を以て、娑婆世界に向て散じ、釋迦佛を供養し奉るに、此等の供物は、相聚まり、變じて寶帳となり、釋尊をはじめ分身等の諸佛の上を覆うた、これ第九神力である。フト十方を見渡せば、此の時、十方の佛國と、娑婆世界と無礙透徹、全く一佛土の状と化した、これ最後の第十神力である。

學者は、經文の順序によりて、之を十種の神力と區別をして居るのであるが、目的とする所は、全く最後の第十神力にあるので、即ち娑婆と十方佛土と通徹して一佛土であるといふのは、宇宙一相、一眞理、一大道であることを示したものである。此の第十の神力を現せんがために、不慮と究竟を表して、舌相、光明の二神力あり、そ

れから聲欸と彈指で地動を起し、之によつて十方諸佛世界と娑婆世界と相通視せしめて、十方諸佛世界、悉く久遠實成の釋迦牟尼佛を中心とし、一相平等、無始無窮の大道に歸するといふのが、此の神力品の要旨である。聲欸と彈指は、衆生の無明の睡眠なるを警覺し、眼孔を豁開して、此の大道體現の久遠の佛陀を見せしむるの意を寓せしものと解釋する、地動は吾人の精神一轉化の大動搖を言つたものであらう。斯くて此の一品は、如上説き來つたところを、佛の神力の事實の上に示して、『法華經』の結論を與へ、やがて地涌の菩薩に、此の法華を托しやうといふのである。

神力を現じ終つて、佛乃ち上行菩薩等に告げ給はく、諸佛の神力は斯くの如く不可思議なれども、此の神力を以てするも、此の經の功德を説き盡さんことはいとも難し、要するにこれ佛として開悟せる眞理の全體、如來利他活動の根源、佛教の最秘、甚深の事、此の一

囑累は、此の經を遺囑し、此の宣布を托せらるゝ意なり。

の『法華經』に遊せりと言ふべきものである。『法華經』のある所、宣布せらるゝ所、其の經卷の存する所即ち佛敎のある所で、佛に得道し、佛に説法し、佛に涅槃に入る、これ衆生の起塔供養をなすべき聖地なりと知れ。…起塔供養と言つても、勿論形の上のことはあるまい、前の法師品にも此の理の説法、讀誦、書寫、經卷所住の所には、七寶の塔を起して供養せよといふことがあつたが、こゝに言ふのも、無論法師品と其の意全く同じである。蓋しこゝに此の神力品を説く所以は、次ぎの囑累品を起さんがためである以下囑累品)

そこで佛は、右手を以て諸菩薩の頭を摩して之に告げ給ふ。曰く、我は無量百千萬億阿僧祇劫に於て、此の難得の無上道を證得することが出来た、今之を汝等に付囑するが故に宜しく之を受持し、以て之を世に宣布せよ、由來佛の法を施すや、毫しも憚む所なく、其の所

「復塔品」より此の一段までを虚空會といふなり。

證を傾け盡くして之を衆生に與へるのである。如來是一切衆生之大施主、汝等も亦聊も法を憚むこと莫れ、佛の眞實智を信するものために、必ず此の『法華經』を説け、然らざるものゝためには、方便を設けて、之を誘引するに努むべし。斯くの如くなし得たならば、これ、即ち諸佛の恩に報じたものである」と。此の佛言を聞ける諸菩薩等、皆大に歡び、合掌して、佛、愛ひ給ふ莫れ、佛の教勅し給ふ所必ず奉行して違ふことなかるべしと答ふ。

此に於て釋迦佛は十方より來聚せる分身の諸佛には、各其の本土に還ることを命じ、多寶如來の塔も、其の戸を閉鎖して故の如くならしめ、釋迦佛は、多寶分座の塔中を出で、虚空より、靈山の上に降還し給ふ。

これで『法華經』の本迹二門の説法は、大體に於て先づ終つたものと見てよい。何となれば、囑累品は、説法終つて後、之を遺弟に流布を

六半、九半の正宗分に對し、十六品半の流通分は、甚だ多しと言はねばならない、して見ると、『法華經』では、此の流通分なるものが、他の諸經の如く輕々看過すべからざるものであるといふことを悟るであらう。日蓮上人が、流通分に着目して一宗を開かれたのは、謂はれあることである。

此の流通分の中でも、本門の分別功德品以下囑累品までは、略ぼ述門の法師品以下の流通分と相對照し、表裏をなして居るので、之を解釋することも、さまで困難ではないが、此の藥王品以下は、殆んど附録の觀があつて、之を解釋するにも、至つて困難である。何となれば、既に囑累が終つたのに、また容易に脈絡の見出され惡くい、諸品が、殆んど雜然と加へられた様に見へるからである。されば此の諸品の順序に就いては、學者にも種々に解釋をして、甚だ定め難い様ではあるが、今は姑らく自分の見るところによつて適宜に要領

を提擧することにきめる。

此の一品は、宿王華菩薩 (Nāgārājāsukasmībhijñā) といふ菩薩が、藥王菩薩とはこれ如何なる菩薩にして、何によつて此の娑婆世界には遊化し給ふぞといふ問に始まり、之に對して、釋尊が之に答へ給ひ藥王菩薩の來歴を述べ給ふといふのが其の大體の組織である。其の由來本事といふのは大體斯うである。

過去無量恒河沙劫といふ古い時に、こゝに日月淨明德如來 (Chand-ravimalasūryaprabhāsā) といふ一人の佛が在した。此の佛、『法華經』を説き給ひし時に、其の教化を蒙つた一人に、一切衆生喜見菩薩 (Sarvasattvapriyadarśan) といふ人が居つて、非常に刻苦精勵して、成佛を求めた結果、現一切色身三昧といふ、禪定を身に得たといふのである。此の現一切色身三昧といふのは、如何なる禪定であるかといふと、要するに此の肉體の上に、直ちに道の光明を認め、色身則ち一大道

色身は肉體な
りては有體な
教に於ては有
の物質を有
して、心と相
心といふ。對
色對指形佛

六種變動のこ
と前にも出て
たり。

給ふと言つて哀痛をしたが、喜見菩薩は之を聞いて、大衆の中に立ちて誓言して曰く、我兩臂を捨つ、之がために我は未來、必ず佛の金色の身を得ん。此の事、虚しからずんば、我が兩臂をして故の如くならしめよと。忽然として兩臂完全舊に復した。此の奇蹟を現するや、三千大千世界は六種に震動し、天上からは寶華が散飛する、一切の天人は皆未曾有なりと驚嘆をする。釋迦佛、宿王華菩薩に告げ給ひ、此の一切喜見菩薩こそ即ち今の藥王菩薩なれ、其の身を捨て、法に捧げ來ること、實に無量百千萬億那由他數に及んで居る夫れ苟くも發心して大道を逮得せんと欲するものは、宜しく少くとも手、指或は足の一指たりとも、燃して佛に供養するの誠がなければならぬ。此の供養は、有らゆる財産寶物を擧げて供養するに勝ること萬々であると。

此のあとに、なほ『法華』の諸經中の王たること、其の護持の功德の大

なること、なほ此の藥王品を護持する功德の大なること、之を以て宿王華菩薩に付囑すること等を述べてあるが、此の一品の要部は上述の一段で終つて居るのである。

藥王菩薩は、迹門說法に於て、『法華』の末法護持を誓つた菩薩で、『法師品』に現はれて來て居る第一の菩薩である。そこで此の一品は、『法華』護持者の模範として、此の菩薩の本事を述べたものであらう。『法華』の護持者は、身命財、即ち身と生命と、財寶の全體を擧げて其の犠牲に供すべしと言ふことを示したものだといふのが、古來學者の説であるが、然しこゝでは、單に報恩のため、或は供養のためには、どんな苦みも厭ふべきでないと言つて、行者を策勵するとか、甚しきに至つては、苦行もなほ辭すべきでないと言つて、苦行を獎勵するなど、いふ、そんな弱い意味、或は淺薄な意味で解釋すべきところではない。實は頗る強い意味で、一身の犠牲を勸めた一品である。

即ち人身供犠の形に寄せて眞意は獻身の譬喩的説明をしたものである。身を犠牲に供し、法に捧ぐるといふことは、有らゆる他の一切の供養に勝れて居るといふことを教へたものである。此の獻身といふことは、自己の全體を道に投ずること、眞理の火を以て、自己の全體を焼き盡すことである、此の光明の赫耀として天地を照破するといふのも無理はない。此の全身犠牲の一切衆生喜見菩薩は、即ち獻身的精神の模範的人格である。現一切色身三昧とは、此の自己を道に投じた一稱呼に過ぎない、身の餓々と燃えるのは、自己の全體が、擧げて眞理と合致し、大智慧と化しつゝある實狀で、一切色身三昧の當然の結果を示したもので、そこまで行かねば、色身三昧の完全の意味を成さないのである。此の實狀に對して一切の衆生が見て喜ぶといふ、即ち一切衆生喜見の名も出たのである。たとひ全身を火に投ずるの力はなくとも、一指一臂たりとも、焼いて佛に供養

後本の「妙莊嚴王菩薩本願經」に「此の妙莊嚴菩薩の關し深き法華經の關係を知らるべし」とある。

するの精神はなければならぬ。一指一臂も肉體の上でいふのではない、自己の一部を道に化することである。これが即ち佛陀の紫磨金色身を得る唯一の道である、喜見菩薩の兩臂復故は、之に證明を與へたものである。斯くの如くにして、『法華』の護持を誓つた藥王菩薩とは、これ獻身的護持者を表した大人格であるといふことを説いたのが、此の藥王菩薩本事品である。

妙音菩薩品第二十四

既に現一切色身三昧は、自己を擧げて、一佛乘の大道に投じ、自己の肉體精神、煩惱も罪惡も、一切を擧げて、眞理の火に焼き盡すと

ころから出て来るものであるといふことを述べ終つたので、之から後の「妙音」「觀世音の二品は、所謂其の色身三味の働きを出す姿様子を述べたものである。即ち此の二品は、現一切色身三味の活現を示したものである。

通常は「藥王品」は、弘法のために、自己を犠牲とする精神を示して、弘法者護持者を策勵し、「妙音」「觀音」の二品は、此の二菩薩の妙用、種々に形を現じて、衆生を濟度し給ふを説き、其の形が如何にあらうとも、これに對して悔蔑の念を、生ずべからずと言ふので、教を受くるものを誡めたのだと解釋せらるゝのである。然しこゝでは、藥王品を以て、道に殉すること、即ち自己を道に捧げ、自己と道と一なること、これ色身三味で、色身三味は、自己の一佛乗化であることを示し、「妙音」「觀音」の二品は、其の色身三味の活現を明したものであると見る方が、前後の連絡も、徹底して居る様であるから、

肉鬘は、頂上起部、
の鬘相に、
梵語に鳥鬘と
沙語に鳥鬘と
ていは、印度に
有せる特種なる
人相なりとせる
人も、故に此の
相好に、大なる
相通の、本大に
相經といひ、今
肉鬘に、大なる
光明なりと

自分の考で、先づさういふことにきめて置く。…扱、妙音菩薩品の
大要は下の如くである。

藥王品の説法が終ると、釋迦牟尼佛は、其の肉鬘と、白毫相とから
光明を放ち、遙に東方を照らし給ふこと恰も百八萬億那由他の諸佛
世界を過ぎたところに、淨光莊嚴國(Vairocanaśmipratimandita)といふ一
佛國があつて、其の國の佛を淨華宿王智如來(Kamaladala vimalanaksitrarā-
sankusumitābhya)といふ。此の國に一人の菩薩があつて、其の名を妙
音菩薩 (Candhasavya) と言つて、其の智慧と禪定とに於て、殆んど完
全せる偉大の菩薩である。ところが今釋迦牟尼佛の肉鬘と白毫から
放ち給ひし光明が此の世界に達し、妙音菩薩の身を照すや、妙音は
淨華宿王智佛の前に進んで、白すらく、「世尊よ、我は之より、娑婆
世界に至りて、釋迦牟尼佛を禮拜供養し奉り、併せて其の佛弟子の
諸菩薩と相見奉らんと欲すと。そこで彼の淨華宿王智佛は、之を誡

みるに、娑婆世界の汚穢なること、佛菩薩の卑小あることを見て、
 之を輕賤すべからずといふを以てし、妙音菩薩は、其の旨を領し、
 やがて、其の座を起たす、其の身、毫も動搖することなく、寂然と
 して三昧に入り、三昧力を以て、忽然靈山の佛坐間近に、衆寶莊嚴
 の蓮華を現出し、以て自己の座をこゝに化作したのである。時に文
 殊師利法王子：文殊菩薩は、佛智の相續者として常に法王子と呼
 ばれて居る。此の文殊菩薩が、此の化作出現の蓮華を見てもこれ何
 事ぞと佛に問ひ奉る。佛は、今妙音菩薩が、淨光莊嚴の宿王智如來
 の下より、此の娑婆世界に來り、我を供養し、『法華經』を聽かんとて
 先づ此の蓮華をこゝに現はせるものだといふことを答へられる。そ
 こで文殊師利は、重ねてさらば、彼の妙音菩薩とは、如何なる善根
 功德を積み、如何なる三昧を修して、斯くは大神力を有し給ふぞ。
 我等も亦、此の行を行じ、妙音菩薩を見奉らんと欲す。願はくは世

尊よ、彼の菩薩の來り給はんに、我等をして之を見せしめ給へと。
 釋尊は乃ち多寶如來、今汝の願を許し給はんと言つて多寶に推讓せ
 られたので、多寶如來は、妙音を呼び、善男子、來れ、文殊師利法
 王子、今汝を見んと願ふと言はれたので、妙音菩薩は、倏忽として
 彼の佛國に姿を没し、瞬時に靈山に來現せられ、釋迦佛を問訊し、
 終つて、願はくは多寶如來に謁し奉らんと言ふので、釋尊之を多寶
 佛に告ぐ、多寶佛は、善哉善哉、汝、釋迦佛を供養し、『法華經』を聽
 き、文殊師利を見んとて、能くこそ來りたれと塔中から挨拶をされ
 る。先づこゝまでが、此の品の一段落である。
 妙音菩薩といふ名稱に就いては、經の本文には何等の説明がないけ
 れども、菩薩の色身三昧で、三界六道、至るところに身を現じ、説
 法濟度するといふ、其の説法の自在徹底無礙なるところから名けた
 ものと解釋するのは至當であらう。扱て此の色身三昧を現するに就

いて、釋迦牟尼佛の智慧の光明、特に最上肉髻の光明に照され、娑婆世界に來至するといふのは、何を表すものであるかといふと、これは釋尊所證の『法華』最上の智慧の光明によつて、色身普現の三昧の活用が呼び出されるといふことを言つたもので、妙音が、此の光明に照され、娑婆に赴かんとした時に、再び多寶佛の聲で來れといふのは、釋迦、多寶一體、理智不二にして、色身三昧の活現を見るといふことを述べて居るのである。されば、妙音の娑婆に來るや、釋迦佛を問訊し、また多寶如來を見んと願ふ、釋尊之を多寶に告げ多寶善哉と呼ぶ、理智不二、體用不二で、釋迦多寶、妙音三者一體を表したものである。體用不二といふのは、理智不二の釋迦多寶が體となり本となつて、妙音の作用が現はれるので、實は一つだといふ意味である。故に此の一段落に於ては、釋迦光明の照耀、多寶の招喚、妙音の釋迦問訊、多寶相見の三が、實に其の骨目となつて居

るのである。

すると、此の時、華德菩薩(Pāṇḍita)といふ一人が、前に一たび文殊の問うた問を繰返して、此の妙音菩薩は、如何なる善根、功德、三昧によつてか、斯くの如き神通、無碍變現自在の妙用を現じ給うぞと問ふ。釋尊則ち之に答へて、過去世に雲雷音王佛(Māghadunhūḥiḥi-Viṇūḥi)といふ佛があつて、妙音菩薩は、此の佛を供養した功德により今の有様とはなつたものであると、其の過去の因縁を説き、此の菩薩は、現一切色身三昧に住するが故に、汝、現に見るが如く、單に此の菩薩は、今此處にのみ居ると思ふべきものではない。其の實は種々の身を現はし、無量の處に其の形を變現して、此の『法華經』を説いて居るのである。と言つて、或は婆羅門教の神と現はれ、或は居士と現はれ、或は出家と現はれ、或は小兒と現はれ、或は婦人と現はれ、或は動物と現はれ、或は小乗の聲聞と現はれ、或は大乗の菩薩

薩と現はれ、若しくは佛と現はれ、自在無碍千變萬化であるといふので、委しく言へばこゝに三十五身の名を數へて居るのである。然し是は勿論三十五身に限つたわけではない。色身三味の變化は無量であるべき筈である。華徳よ、妙音菩薩の大神通、智惠の力を成就すること、其の事、是くの如し。善男子よ、其の三味を現一切色身と名づく。妙音菩薩、是の三味の中に住して、是くの如く、無量の衆生を饒益すとあるのが、此の一品後段の要點で、しかも此の色身三味で、普く至る所に示現するといふのが、主要の一項である。此の妙音菩薩の謂はれを、佛の説き給ふを聞いて、座にありし諸菩薩は皆等しく此の現一切色身三味を得た。此の結果を見んがために、文殊は初めに之を問ひ、華徳、後に之を尋ねたので、二菩薩の問、因となつて、諸菩薩悉く色身三味を得た時に、始めて正しく妙音菩薩を見得たものである。されば妙音の來た時に、釋迦、多寶と

天子(Devanī)は總羅門(Devanī)の神に如月(Devanī)星(Devanī)等(Devanī)たり。或(Devanī)は天子(Devanī)星(Devanī)等(Devanī)たり。或(Devanī)は天子(Devanī)星(Devanī)等(Devanī)たり。

の問訊相見はあつたが、未だ文殊諸菩薩との直接の相見、問答はない。今始めて妙音と同じ境界になつたのが、即ち妙音との相見であらう。此の相見終つた時は、妙音の娑婆に用事の濟んだ時、淨光莊嚴國に歸還すべき時である。故に其の終りに、妙音は本國に還り、宿王華佛に向ひ、其の次第を語り、諸菩薩をして現一切色身三味を得せしめたりと告げる。

此の妙音菩薩の來往を説く時、席にありし四萬二千の天子は無生法忍を得、華徳菩薩は法華三味を得た。これが此の品の終りである。色身三味といふのも、無生法忍といふのも、法華三味といふのも、つまりは同じことで、無生法忍は、道の本體は、差別を超越して生滅のない、平等常住のものだと認得したところで、忍は、佛敎では認と同意味に用ひられて居るのである。色身三味は、此の常住不變無生滅の道から、無量の變現をするといふ、作用の方面、差別の方

面からつけた名稱で、法華三昧は二者一體の大道を體得する所をいふのである。然し此の三、實は別々なものではない、道の三方面の見方であつて、道に三あるわけではないから、今、唯三種の名稱により、三種の方面あることを知らしめ、しかも此の品では、色身三昧を中心とし、無生法忍、法華三昧、三直ちに一の大道、根本に溯つて言へば、色身三昧も、法華三昧から流出するものたることを知らしめたものだと解釋してよいであらう。

此の妙音品の説明は、特に古來一般の學者と、其の解釋を同じくせぬ點が多いが、これは殊にこゝに附記して、斷つて置く。

觀世音菩薩普門品第二十五

「普門示現」は、普門に示現する意に、時機に應じ、場合により、時に於て、何種のものに現すなり。

此の一品は、前の妙音品と姉妹品であつて、共に色身三昧の活用、無量に其の身を現じて、衆生を度脱せしむるといふ、所謂普門示現を説いたものである。特に此の品には、觀世音菩薩が、三十三身に變現することを説いてあるので、三十三身普門示現といふ語は、化他濟度の代用語の様になつて、今や一般佛敎者の口にする所となつて居る。これ實に觀音信仰の盛なるの致す所で、佛敎に説く諸佛菩薩、其の數が多いけれども、一般民間に最も古くから、最も廣く崇拜せられて居る點では、恐らく觀世音菩薩に及ぶものはあるまい。

觀音は觀世音の略で、原語は、阿利耶縛盧吉帝濕縛羅 (Aryavalokiteśvara) といふのである。原語の通りを譯すれば、觀自在といふのがよいのであるが、此の菩薩の性質の上から、意味で觀世音と譯するの

普通に、觀音菩薩は、阿彌陀佛の左、右に侍る。所謂、佛の侍者、合して觀音菩薩と稱す。是なり。

法華物語

二六

である。この事は、後に明になる。扱此の菩薩は、古くから、娑婆有縁の菩薩と言はれ、其の信仰崇拜が最も盛で、例へば不動、釋迦文殊、普賢、地藏、彌勒、藥師、觀音、勢至、阿彌陀、阿闍、大日、虚空藏といふ十三佛が、先づ佛教の佛菩薩中で、一番廣く拜まれて居るのであるが、然し中でも、觀音が一番古く、一番廣い信仰を博して居るとは、人の知る如くである。觀音の淨土、補陀落山(Potala)は、其の名、至るところに轉用され、西藏などでは、其の首府拉萨の法王宮の所在地は、觀音の淨土として、補陀羅と呼ばれ、法王は觀音の化身と信せられて居る。日本にも、日光山は、もと二荒から轉じたので、二荒は補陀落から變じたのである。勝道上人といふ人が、觀音の像を負うて、あの山を開き、之を安置したのが本で、補陀落山と呼ばれたものである。それであるから、此の一品と、前の妙音菩薩品とは、姉妹品である

濕婆は、印度の大神、即ち創造神、即ち破壊神、即ち保神、即ち救神、即ち知識神、即ち神の教主なり。

にも拘はらず、獨り此の普門品のみ、最も廣く知られ、讀まれ、研究され、妙音菩薩品は左程でもない、全くこれは觀音菩薩の信仰が他に勝れて盛であつた結果である。天台大師が、之を法華經中の四要品と數へ、流通分の中に於ける王經、即ち當途王經と言つたのも無理がないので、卅三身普門示現して、此の法華の流通をなすといふ、色身三昧の活現は、之を極致とするを見たのである。同じ普門示現でも、何故妙音は、斯く盛んに拜まれます、獨り觀音の信仰のみ盛んであるかといふと、觀音は、當に法華經ばかりではなく、他の諸經にも多く現はれ、且つ觀音のこのみを説いた經典も甚だ多いので、之に反して妙音菩薩は、單に法華經にある丈であるから、印度以來既にさういふ理由があつたものと見なければならぬのである。それをいふには、此の觀音は、元來娑羅門教の濕婆神(Śiva)といふ神の變化して來たものだと、學者の説もあるが、佛教の方から言ふ

二七

古來六觀音
地獄正化等
千手千眼
十頭正觀
准泥面修
如化輪天人
りて教のせ
へりし化と

法華物語

と、此の普門示現の觀世音は、婆羅門教の濕婆の諸變化身となり、眞理を宣傳する者と、逆に説明をして行くのである。何は兎もあれ佛敎の諸菩薩中で、事實此の觀音ほど多くの形を取つて崇拜されるものは、外にはないので、六觀音、或は七觀音、或は十五觀音など、言つて、形の異つて居る觀音が、其の數、甚だ少くない。之を以ても、普門示現が、獨り觀音に付いて廻つて居ることがわかるのである。六觀音といふのは、聖觀音、千手觀音、馬頭觀音、十一面觀音、准泥觀音、如意輪觀音で、之に不空罽索觀音を加ふれば七觀音である。其の外、十五觀音の中で、白衣、葉衣、水月、楊柳などの諸觀音は、繪畫の題目などになつて居るので、能く人が知つて居る。また密敎の意によると、地藏菩薩も觀音の變化で、胎藏界曼荼羅の中で、慈悲を表した蓮華部は、觀音院と地藏院に別れ、觀音の慈悲極まつて、地藏となるといふことになつて居るのである。理窟

はいづれにしても、普門示現、即ち普現三昧、或は色身三昧の模範的人格を示すものは、事實に於て、觀音菩薩であるといふ信仰が、印度から支那、西藏、日本、佛敎國通じての信仰であるから、普門品の重要視せられるのは當然のことである。

「普門品の發端は、無盡意菩薩 (Aksyanatipiprichu) が、釋迦佛に向ひ「世尊よ、觀世音菩薩は、何の因縁を以て觀世音と名くるや」と此の菩薩の名稱の謂はれを問ふに起るのである。佛は之に答へて、「善男子、若有無量百千萬億衆生、受諸苦惱、聞是觀世音菩薩一心稱名、觀世音菩薩、即時觀其音聲、皆得解脫」と言つてある。此の一節が、實に普門品の骨髓であらう。こゝで耳根圓通と、一心稱名と、皆得解脫の三要點がある。若し衆生が、觀世音菩薩の慈悲を聞いて、一心に其の御名を稱ふれば、觀世音菩薩は、また響の聲に應ずるが如く、衆生の音聲を聞いて、直ちに其の苦惱を解脫せしむるの手段を取る、此の

「機法」とは、
人法を指す。機は
人を指す。理は
法を指す。相照
と相照する所を
法感照と相照
す。

衆生が觀音に聞き、觀音が衆生に聞き、菩薩と衆生と相聽き、相應するところは、即ち機法感應の妙を示したもので、聞の一字で彼我道に相合致し、抱擁するの理を示したものである。「首楞嚴經」には、之に耳から道に入るといふので、觀音の耳根圓通と名をつけて居るのである。必ずしも、肉體の耳に拘はる必要はない、心の奥、胸の底には、叩けば響く山彦の如く、宇宙真理の根本に共鳴する、感應同交の理はあるのである。こゝを假りに聞の字にたより、耳に事よせて耳根圓通といふだけのことである。それから一心稱名であるが言葉で言へば、南無觀世音菩薩と稱ふることである。然し之に就いて、昔の學者は、事の一心、理の一心といふことを言つて居るので、事の一心とは、文字通りに、口に稱名すること、理の一心とは、心に稱名することである。心に稱名するといふのは、此の心が觀世音菩薩に南無し、南無は歸命で、自己の全體を捧げる意味で

あるから、我と觀音と一體になり、稱ふるもの、稱へらるゝもの、差別を泯亡し、南無觀世音菩薩の言語を超越して、南無觀世音菩薩の事實を體現したところを理の一心稱名といふのである。理の一心稱名であるから、衆生の心と觀音の理との、根底に共鳴する、耳根圓通でなければならぬことになるのである。それから第三に皆得解脱であるが、これは此の理の一心稱名により、耳根圓通を得せしめんとて、觀世音菩薩は、こゝに普門示現の活作用を示すのだといふことをいふので、衆生の性質、境遇、事情、種々の機根に應じ、無量の形となつて、之を救済することをいふのである。前の妙音品では、妙音菩薩が、宿王華の淨土から、佛に招かれて娑婆に來降したのであるが、今は迷へる衆生の機に感應して、補陀落から娑婆に示現するといふのであるから、普門示現の意味が、一層前品に比して適切に現はれて居るわけになるのである。鏡の様な水に月の映るの

は妙音品である。濁れる沼を照して、其の光明に美化するのは普門品であるとも言はうか。

そこで、此の菩薩の名を稱ふる時は、一切の災厄を免れて、決して危難に陥ることはないといひ、先づ第一に七難を免ることを明してある。七難とは、第一、火難、此の觀世音菩薩の名を持つるものは「火不能燒」といふのである。火は煩惱の火で、心に觀世音の理を體得したものは、其の確乎不拔、寂然不動の眞理、いかでか、此の煩惱の火を以ても之を燒き得べき、これ其の意味である。第二、水難、爲大水所漂、稱其名號、即得淺處、これまた惡業を洪水に譬へたのである。第三、風難、若し人、海上、黒風に遭ひ、船覆り、羅刹鬼の國に墮せんとせんも、一人にても、稱名するものがあれば、此の難を免るべし。これは苦惱を指して風と言つたのである。煩惱の火、惡業の水、苦痛の風、これ惡業苦の三をいふのである。第四、王難、こ

羅刹鬼(三)と譯せられて居るから、恐るべき惡鬼の名稱なり。

彼の觀音に力(カ)を念(念)いで、刀(ナイフ)を尋(たづ)ねて、段々(だんだん)に壞(こ)せんとす。

紐(ヒモ)は「手かせ」枷(カ)は「足かせ」鎖(サ)は「頸かせ」を縛(むす)るものであ

れば、刑罰を受け、刀杖の難に罹る時も、稱名によりて、執行者の所執刀杖、尋段々壞而得解脱、此の文は、後の重頌に「念彼觀音力、刀尋段々壞」として、最も人に記憶せられて居るところの文である。第五、鬼難、一切の羅刹鬼、此の持名の人を犯すこと能はざるを言ふのである。第六、枷鎖難、枷鎖の難を受けても此の菩薩の名を稱ふれば、皆悉く斷壞して終に免るゝことが出来る。第七、怨賊難、これは怨賊の中を、多くの財寶を携へ通過せん時、若し衆人一同に此の菩薩の名を稱ふる時は、皆、此の危難を免るべし。以上即ち七難であるが、中に於て、或は王難といひ、鬼難、枷鎖難、怨賊難といふもの、畢竟皆、煩惱、惡業の自己を殺し、自己を屠り、自己を縛し、自己を劫かすを言つた者で、七難は、要するに、皆自己を出でないものである。自己の稱念、觀音の力と契合して、此等の災厄は、一切解脱することを得るのである。斯くの如く、南無觀世音菩

三毒の根本は貪瞋痴の根本とするは男女の愛欲の根本とするは男女の愛欲の根本とするは男女の愛欲の根本とする

法華物語
薩と稱する、稱名によつて、即時に其の音聲を觀じ、苦惱を解脱せしむるが故、名けて之を觀世音菩薩といふのである。以上は、假りに形に寄せて、肉體の苦惱を除くに當り、説いたのであるが、次に、「常念恭敬觀世音菩薩」嬉欲、瞋恚、恐痴の三毒を脱離する事を得べしと説いてある。此の三毒は、佛教では、一切煩惱の根本としてあるのである。故に嘉祥大師の如きは、獨り觀世音といふばかりではない、こゝの意味で言へば、觀世音菩薩と言つてもよいと言つて居る。耳に音聲を聞くばかりではなく、常念の意を觀じて、三毒を除くからである。なほ最後に、若し女人にして子なきものは、此の菩薩を禮拜すれば、自由に其の男女の兒を擧ぐることを得んとある、子育觀音などといふのは、これから出て來たものであらうか。然しこゝにいふのは肉體上の男子女子をいふのではない、智慧と禪定との二つを男女の子に喻へたものだ、古い學者は解釋して居るので

法華物語

三

四より九まで、神小門の教主、一輪の王に對し

ある。智慧は積極的であるから男とし、禪定は靜止的であるから女とし、觀音の力によつて、此の二者を具し、佛道を成就することを言つたものだといふのである。嘉祥大師は、此の文によつて、觀世音菩薩と言つてもよいと、説いて居るのである。

こゝまでが、觀世音の名稱を説明した一段であるが、以下は、此の菩薩が、自由に普門示現する、即ち觀自在なる所以を説明し、色身三昧の妙用を示すのである。無盡意菩薩が、然らば、此の觀世音菩薩は、如何にして娑婆世界に來り、如何なる方便を以て、衆生を救濟し給ふやとの間に對し、こゝに佛は、三十三身、十九說法を示すのである。「善男子、若有國土衆生、應以佛身得度者、觀世音菩薩即現佛身而爲說法」といふに始まり、(1)佛身、(2)辟支佛身、(3)聲聞身、(4)梵王身、(5)帝釋身、(6)自在天身、(7)大自在天身、(8)天大將軍身、(9)毘婆沙門身、(10)小王身、(11)長者身、(12)居士身、(13)宰官身、(14)婆羅門身、

觀世音菩薩普門品第二十五

四

八、十九は同
の神なり。

法華物語

三

(15) 比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷身、(16) 長者、居士、宰官、婆羅門の婦女身、(17) 童男、童女身、(18) 天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽人非人身、(19) 執金剛神身、…此の十九段に分けて、三十三身を現じ説法すべきことを説いて居るから、之を三十三身、十九説法といふのである。(十九に字肩に付した十四を)

佛は、此の觀世音の三十三身普門示現を説き、斯くの如き次第であるから、汝等一心に此の菩薩を供養せよ、之を供養すれば、世界恐るべきものなし是故、此娑婆世界皆號之爲施無畏者と示されてある、これ觀音を施無畏者といふ根本である。そこで無盡意菩薩は、早速佛の教により、頸の寶纒絡を取つて、之を觀音に供養したところが、菩薩は之を受けることを敢てせぬ。そこで釋迦佛は、此の無盡意及び他の座中のものを感み、之を受けよと言はれたので、菩薩は之を受納し、更に之を兩分して、一は釋迦佛に奉り、一は之を多寶如來

にの塔に奉る。此の末段は、觀音の色身三昧、普門示現は、釋迦、多寶二佛一體の活現であることは、前の妙音と同じ理由であるから、其の功を根本に推して、敢て無盡意の供養を受けず、しかも釋尊の勸めにより、之を受けて之を二分し、二佛に獻じたのは、之を本に歸して、釋迦、多寶、觀音、三者一體を表明したものである。

これで一品の要旨は終り、次に重頌があるが、同じことを繰り返すのであるから、之を略する。此の重頌が、羅什譯には元來無かつたといふ話のあることは前に述べた如くである。

陀羅尼品第二十六

陀羅尼品第二十六

三

密教即ち眞言宗に於ては、眞言、契印、契目、契相、契其、此の陀羅尼は、外ならす。

陀羅尼(Dhāraṇī)は梵語で、總持と譯せられて居る。一語にして澤山の意味を含蓄して居る言葉のことで、例へば、『法華』と言へば、此の經中に合んで居る、内容の全體を擧げて意味して居るので、『法華』の哲學的の意味も、文學的の意味も、宗教的の意味も、此の經の功德も影響も、何れかも、悉く合んで居るのであるから、之を一つの陀羅尼と見てもよいわけである。が然し普通には、印度では、之と違つて此の陀羅尼は、殆んど符號の様に唱へられ、簡單な語で、無量の意味を擧げて現はす神聖な語と考へられ、一種の秘密語として相傳したのである。故に此の秘密語は、支那に傳はつても翻譯されずにイヤ寧ろ翻譯が出来ないので、原語のままに唱へられ、それで完全な功德のあるものと信せられて來たのである。此の秘密語が、法華經にも加はつて居つて、此の陀羅尼品を成して居る。此の秘密語を唱ふれば、法華の行者は、之によつて守護せらるゝものといふの

である。陀羅尼に就いては、なほ論すべきこともあるが、こゝでは先づ大體そんなことにして、本文の筋を言はう。

第一に出て居るのは、藥王菩薩の陀羅尼である。『法華』行者の功德は偉大なるものなれば、我、今陀羅尼を説き、之を守護せんとて左の如く、陀羅尼を説いたといふのである。

アニ、マニ、マネー、マ、ネー、シレー、シャリター、シャミヤ、シ、ビタイ、センター、モクター、モクタビ、シャビ、アイシャビ、ソービ、シャビ、シャエー、アシャエー、アーギニ、センター、シャビ、ダラニ、アロキヤバサイ、ハシャビシニ、ネービター、アーベンタラネービター、アータンダハーレーシユダイ、ウクレー、ムクレー、アラレー、ハラレー、シユギヤシ、アサンマサンビ、ブツダビキリジ、ター、ダルマハリシター、ソーギヤネクシャネー、バシャバシシユダイ、マンタラ、マンタラシャヤタ、ウロタ、ウロタキョーシヤラ、アシヤラ、

アシャヤタヤ、アパロ、アマヤナタヤ、

此の陀羅尼は、何の意味かといふことは、こゝでは解釋をしない。それから此の音は、一々漢字にあてゝあるのであるが、それも略して、普通に誦んで居る音だけを出して止める。なほ梵音と比較をする方が正しく發音が出来るのであるけれども、煩しいから皆省く。も一つ注意することは、此の音は、もとは梵音を傳へ習つたものであるけれども、段々年代の経過と共に、發音も次第に訛り、甲乙の間に、読み方の相違を來す様になり、人によつて多少の差異もある。殊に天台と日蓮では、主として讀んで居る讀み方が、餘程違ふ點もあるが、先づ今は其の一傳によるものと見て置いてもらひたいのである。此の藥王の陀羅尼を説くや、佛は之を讚美し給ひしにより、次ぎに勇施菩薩 (Prudhasana) が、さらば我もまたとて左の陀羅尼を説く。

西洋人が梵本
から譯したた
此の陀羅尼が
梵音のまゝで
出で居るも
少しく支那傳
來の支那傳
せり。

ザレー、マカザレー、ウキ、モキ、アレー、アラハター、ネッレー
 テー、ネッレータハター、イチニ、キチニ、シチニ、ネッレーチニ、
 ネッリチハチ、

次ぎに、毘沙門天 (Vishamam) の陀羅尼、

アリ、ナリ、トナリ、アナロ、ナビ、クナビ、

それから持國天 (Dhritarata) の陀羅尼、

アキヤネー、キヤネー、クリ、ケンダリ、センダリ、マトーギ、ジョ
 ーグリ、プロシャニ、アチ、

次ぎに十羅刹女と言ふ、十人の女鬼神によりて説かれた陀羅尼、

イデービ、イデーミン、イデービ、アデービ、イデービ、デービ、
 デービ、デービ、デービ、デービ、デービ、デービ、デービ、デービ、
 ケー、ロケー、タケー、タケー、タケー、トケー、トケー、

此の「陀羅尼品」は、實は略して除いてもよいので、餘り必要はないの

毘沙門天は、持國天の神に
 守る神に
 長二天と共
 之を四天王
 といふと、
 是なり。

であるが、然し除くのも物足らるので、兎に角これ丈、筋を述べたのである。

此の十羅刹女の陀羅尼を説いた後のところに、「佛告諸羅刹女善哉善哉汝等但能擁護受持法華名者福不可量」とある文は、日蓮上人が、『妙法蓮華經』の名を唱へた丈でも、成佛が出来るといふ唱題成佛論の本據となつて居る所であるから知つて置かなければならない。

此の「陀羅尼」最も多
品は、誦するは
日蓮宗にして
同宗の所請に
用は、専ら之を
羅尼のみにし
するなり。

妙莊嚴王本事品第二十七

此の妙莊嚴王本事品で、またく藥王菩薩のことに立ち返るのである。即ち此の一品は、前の藥王菩薩の本事、所謂過去譯を述べて、

此菩薩の性質を語るであつて、矢張り品名を藥王菩薩本事品とするのが、正當であるけれ共、前と同じ品名になるから、妙莊嚴王を品名としたのである。妙莊嚴王といふのは、過去に於て、藥王菩薩の父たりし人で、元來非常な婆羅門教の信者であつたが、藥王は遂に之を感化して佛敎に歸入せしめたので、其の感化せられた、妙莊嚴の方を取つて、一品の名としたゞけである。

『法華經』の流通分は、前にも述べた如く、先づ囑累品で、全體一段落を告げて居るものである。「藥王菩薩品以後は、本經の附録の様なもので、一見したところでは、各品の間には、餘り緊密の連絡關係ありとも見えぬのであるが、然しまた退いて考へて見れば、藥王の色身三昧が本になつて、色身三昧の活現と見るべき妙音、觀音の二品が出で、それから藥王が、主として弘經者守護の陀羅尼を説き、そして此の妙莊嚴王品に來て、藥王の婆羅門教感化、即ち破邪の一段を

人と法と相對し、之をニホリと音讀す。

點綴したものと見てよいのであらうか。古來の學者は、前の陀羅尼品を以て、秘密語によせた、法を以て、弘經の人を守護することを明し、此の品は、藥王の本事を説き、其の過去に於て、法を守護したること、即ち人が法を守護することを明したものだと言つて居る。人が法を守護すると言つても、固より當らないわけでは無いが、もつと強い意味に、破邪を明したものとし、此の經の積極的の弘布宣傳は、「妙音」觀音で盡きて居るが、消極的、破邪的宣傳弘布は、此の品で示されたといふ方がよいと思ふ。此の破邪的宣傳弘布の前に「陀羅尼品を置いたのは、守護といふことに、一層理由あらしむる様にも思はれるのである。

「陀羅尼品の座が終つて、佛は、大衆に向ひ、下の如く物語られた。今より無量の過去にこゝに雲雷音宿王華智如來 (Tadāraṅgajitasuvarānukṣataraṅgasukusumibhijñā)と申す佛在し、此の佛の在せし所に、妙莊嚴

(Subhavyala)といふ國王があつた。其の夫人を淨德(Vimaladatta)といひ、其間に二人の子がある。一人を淨藏(Vimalasambha)といひ、一人を淨眼(Vimalanetra)といふ。此の二人の子は、佛道を行じて、智惠禪定兩つながら通達し、母なる淨德夫人も、また共に佛道に深く歸向せるものであつた。此の時、彼の雲雷音宿王華智佛は、此の妙莊嚴を眞の道に入れんとて、「法華經」を説き始めたが、淨藏、淨眼の二人は、早速、母の所に至り、掌を合せて、「母君よ、今、佛「法華經」を説き給へり、願はくは、共に行いて、佛を供養禮拜し、其の説法を聴き給へ」と、淨德夫人は、父妙莊嚴の婆羅門の法に固執し、我等の共に佛所に至るを許し給はざるべきが故、先づ去つて、之を父に請へと告ぐ。二子は、我等是法王子而生此邪見家と言つて、深く悲傷の情に沈めるを見、母は之を獎勵し、宜しく速に父の所に赴き、神變を現じて父の心を翻さしめよといふ。そこで二子は、父の所へ行き、種々の

不思議を現じたので、父王は驚いて、「全體汝の師はこれ何人ぞと問ふ。二子は答へて、我等は雲雷音宿王華智佛の弟子なり。我が師、今、彼處に『法華經』を説き給ふと申す。さらば我一たび汝の師を見んとて、こゝに父王の心、漸く一變する。此に於て二子は、父母に速に佛所に至るべきを勧め、佛に値遇することの容易ならざるを述べ二人の出家を許し給はんことを請ふ。そこで妙莊嚴王、淨徳夫人は二子と共に、多く眷屬從者を伴ひ、佛の説法を聴き、遂に妙莊嚴王、他日、必ず作佛して娑羅樹王佛(Salvatranaya)といふべしとの記別を受け、國家は之を其の弟に付し、夫人、二子と共に、佛法の中に出家し、『法華』を行じ、こゝに一切淨功德莊嚴三昧を得たといふのである、實にも此の淨藏、淨眼の二子とは、實は過去に於て、無量の功德を積み、善根を修し、諸佛の供養をなしたるもので、今、妙莊嚴を化せんとて、其の家に生れたものである。——釋迦佛、衆に告

淨徳夫人とは、此處に現に居る、光照莊嚴相菩薩 (Vairocana's niprati-mandharini) である、そうして淨藏とは今の藥王菩薩であり、淨眼とは、此の藥上菩薩 (Bhechjyasamudgata) である。藥王、藥上二菩薩の成就せる大功德は此くの如し、其の名を知るもの、皆宜しく禮拜せよと。

普賢菩薩勸發品第二十八

普賢菩薩は、梵語にて、三曼陀跋陀羅 (Samantabhadra) といひ、眞理の究竟完全を表する菩薩である。普は、其の徳の天地に滿つるをいひ

賢は、利他の善行を成就するを意味する言葉である。此の菩薩、常に白象に乗じて居るのは、此の菩薩の徳の純淨にして、しかも内には利他の行力剛健であり、外には溫柔慈悲の相を帯ぶることを示すものである。本經序品に於て、文殊菩薩、先づ其の端緒を開き、今普賢菩薩、此の經を結ぶものは、全く智と理と相對し、其の終始をなすことを明にするものである。文殊の乘るところは師子であり、普賢の乘るところは象である。共に獸中の王であつて、一は剛一は柔、一は智を表し、一は理を表するものである。此の一品の目的は、普賢菩薩が、末世に於ける、『法華』の護持宣傳者を擁護せんことを誓ふといふにあるのである。

之より遙に東方に當り、寶威德上王佛 (Ratnakajyotsirguri) といふ佛の在す國がある。こゝに普賢菩薩あり、娑婆に於て、釋尊が、『法華』を説き給ふを聞いて、無數の菩薩、八部の衆に圍繞せられ、耆闍崛山

正定の解は、
なほ詳細な要
すれども煩を
に省略す。特

に至り、先づ釋尊に對し、「如來滅し給ふの後に至らば、如何にしてか、此の『法華經』を得べき」と問ひ奉る。佛は之に就いて四法を説かれ居る。四法といふのは、一、爲諸佛護念二、植諸徳本三、入正定聚四、發救一切衆生之心と、これである。諸佛の護念といふのは、恰も植物が、日光に照されて、緑の芽を吹く様に、眞理の光明に包擁せられて、外、悪心を惹き起すなく、内、善心をはぐんで、佛法を成就することである。諸の徳本を植うるといふのは、眞理の根本を心に觀することである。一は外より擁護するに寄せ、二は内より萌え出づる力に寄せていふのである。正定聚に入るといふのは、眞理を確に認め得て、再び退轉せざる位置に進むをいふのである。暗中には、東西を辨せずとも、微光を一方に認め得たものは、再び暗中に引き戻す筈はない。退轉する位は不定の人々で、之を不定聚といふ。苟くも道の一端を見得た菩薩は、之を不退轉の菩薩、即ち

正像末三時に
 出づるは五百
 二の千五百
 五の千五百
 二の千五百
 五の千五百
 二の千五百
 五の千五百
 二の千五百
 五の千五百

正定聚の菩薩と呼ぶのである。一切衆生を救ふの心とは、云ふまでもなく利他心である。此の内外の力で、眞理を認め得、之と同時に人を道に導かんとする。慈悲心の發動するあらば、これ即ち四法具足で、此くの如き人、「法華經」を末世に得べき人であるといふのである。

そこで普賢菩薩は、佛前に於て誓願すらく、佛滅後の後の五百歳の末世、濁惡の時に於て、若し此の經典を受持するものあらば、之を守護して、一切の難を避けて、安穩なることを得せしめん。如何なる惡魔も、之を惱ますことを得ず、行住座の三に於て、此の經を讀誦思惟するものあらば、我れ六牙の白象に乗つて其の前に現はれ、之を慰安し、之を喜悅せしめ、其の心に領せざる所は、之を通利せしめん。我を見るが故に、必ず陀羅尼を得ん、之を旋陀羅尼、百千萬億旋陀羅尼、法音方便陀羅尼といふ。これは道場に於て、普賢を感

見する實際の修行法があるので即ち三七日の間、一心に「法華」を修習すれば、普賢菩薩は、六牙の白象に乗つて、必ず其の人の前に現はれ、説法して利益を授け、陀羅尼を得せしむるであらう。これが普賢感見と言つて、面、親しく此の普賢を見る修行である。そこで普賢は、また此の陀羅尼を説いて、魔、或は女人等のために誘惑せらるゝが如きことなからしめんとて、こゝにまた普賢の陀羅尼があるのである。音は前の「陀羅尼品」に準ず。固より純粹の梵音にはよらず單に日本で讀み習はされて居る音を列ねて置く。

アタンガイ、タンダハチ、タンダハチ、タンダクシャレー、タンダシダレー、シダレー、シダラハチ、ブツダハセンネ、サルバダラニ、アバタニ、サルババシヤ、アバタニ、シユアバタニ、ソーギヤバビシヤニ、ソーギヤネ、ギヤダニ、アソーギ、ソーギヤ、バギヤタイ、テレーアタ、ソーギヤトリヤ、アラテ、ハラテ、サルバソーギヤサン

マヂ、キランダイ、サルバダルマシユハリセッター、サルバサッタロタ
 キョーシヤリヤ、アトギヤダイ、シンナビキリタイター、
 されば、濁悪の末代に『法華經』の流布せられて居るといふのは、これ
 實に普賢菩薩の威神力によるものと思ふべし。『法華』の行者は、常に
 此の菩薩保護の下にあるものである。

之から普賢は、また五種法師の功徳を挙げ、五種法師の行、即ち普
 賢の行であるといふこと、普賢は此等を守護すること等について述
 べる。そこで釋尊は普賢を讚し、我また神通力を以て、普賢菩薩の
 名を受持するものを守護せんといひ、普賢の守護即ち釋尊の守護、
 普釋一意の趣きを説き、普賢守護の下に、『法華』を護持するものは、
 『法華』の上に於て釋迦牟尼佛を見奉り、釋迦牟尼佛の金口より直接其
 の説法を聞き、現に親しく釋迦牟尼佛を供養し奉るので、釋迦牟尼
 佛の御手にて其の頭を摩でられ、釋迦牟尼佛の衣を以て覆はるゝも

神通力に起る
 定用上に起る
 作用六種の起る
 通用六種の起る
 神通六種の起る
 他心通、天耳通、宿命通、他心通、天耳通、宿命通、

のである。蓋し斯くの如き人は、世欲に動かされず、邪教に惑はさ
 れず、悪人に近かず、少欲知足、安然として、所謂普賢の行を修す
 るの人で、必ず他日大道を體悟するの人である。之に反して、此の
 『法華經』を輕賤毀譽するあらんか、其の惡報想ひ見るべし。是故普賢
 若見受持是經典者當起遠迎當如敬佛これが此の品の最後の佛言であ
 る。斯くて此の品の説法の座に於て、或は旋陀羅尼を得たる菩薩、
 其の數無量、普賢の道を具し得たるもの、其の數また三千大千世界
 微塵數である。

以上を以て、『法華經』の全部を終つたのである。故に佛説是經時普賢
 等諸菩薩舍利弗等諸聲聞及諸天龍人非人等一切大會皆大歡喜受持佛
 語作禮而去と言つて、此の『法華』の大説法はこゝに解散したのであ
 る。

附 說

『法華經』の翻譯に就いては、序説に於て、略述したから、最後に『法華經』の研究に關する重要な、歴史上の二三の點をつけ加へて置かう。細かいことは、普通の人には用はない、却つて煩はしさを増すのみであるから、成るだけ之を省略する。

『法華經』の研究について、第一に記憶さるべき人は、支那では、天台大師である。勿論大師以前にも、『法華』の研究は、中々盛んであつて佛一代所説の諸經の中で、『法華』は、其の總べてを攝束し、之を最後の目的に歸着せしめたもの、即ち名けて之を同歸教と言つて居つたのは、殆んど學者の輿論と言つてもよいので、特に此等の學者の中で、著しいのは、光宅寺の法雲といふ人である。此の人は梁の時代の人で、其の首府であつた建康の光宅寺に居つた、め光宅の法雲と

光宅は、開善寺の僧長と莊嚴寺の僧長とに、三世の大法師といへり。

言はれ、非常な學者で著書も頗る多いが、『法華』に就いては、『法華經義記』といふのが八卷ある。然し天台大師が現はれて、『法華』に對する研究に一新紀元を開いて以後は、後の『法華』研究は専ら之を證據とし殆んど此の域外に出る能はざるの觀あらしむるに至つたのである。然しながら、天台の所説も、皆其の以前の學者の説に負ふ所が少くないので、特に光宅の説には頗る得る所があつたのである。加之、天台と略は同時代に吉藏といふ人がある。越州の嘉祥寺といふ寺に居つたので、世に普通嘉祥大師と言つて居る。三論宗といふ一宗を大成した人で、著書も頗る多いが、『法華』に就いては、『法華經義疏』十二卷あり、『法華玄論』といふのを十卷書いて居る。共に嘉祥一家の意見を發表したのであるが、これも天台の説の如く、廣く行はれては居ないが、然し『法華經』研究者は、光宅の『義記』と共に、必ず參考せねばならぬものである。本書にも、時々嘉祥の名を出してあるから注意

せられんことを請ふ。それから、天台より少し後れて、唐の初期に
 窺基といふ學者がある、これは彼の印度遊歴者として有名な玄奘三
 藏の弟子で、即ち法相宗といふ宗旨の教義を發揮する上に、非常に
 貢獻をした人で、唐の首府、長安の大慈恩寺に居つたために、世に
 慈恩大師と言つて居る。五百の疏主と言はれ、註釋書を五百部も書
 いたと噂されるほど著書が多かつたが、『法華』については、『法華玄贊』
 が十卷ある。此の『法華玄贊』は、法相宗の見地で、『法華』を解釋したの
 であるから、天台とは全く異つて、所謂三車家の説である。三車家、
 四車家のことは、『方便品』の下に於て之を一言して置いた。此の二
 家争論の本となるのは、即ち此の慈恩の『法華玄贊』である。
 扱て後世『法華』研究の證據として目せられて居る、天台の智者大師と
 は、如何なる人ぞといふに、其の名は智顛といふので、台州の天台
 山に居た爲めに天台大師とも呼ばれ、智者大師といふのは、晋王廣

天台大師の著
 なるものを三
 大部五小部と
 呼べり、三小
 部は『止観』
 『文句』『観
 音玄義』に
 なり、五小部
 等は五小部の
 中に属す。

(隋の文帝の二子、後に即位して)から賜はつた號だといふことである。
 其の生れた所は荊州で、後にそこへ寺を建て、玉泉寺といふ。其の
 著書中で、直接『法華經』に關するものは、即ち三大部であつて、『法華
 玄義』十卷、『法華文句』十卷、及び『摩訶止観』十卷である。此の外に、『観
 世音普門品』には、別に特に解釋註疏を加へたのが二つある。一つは
 『観音玄義』二卷で、一つは『観音義疏』三卷である。其の中で、『法華文句』は
 大師が五十歳の時、陳帝の請により、天台山を出で、建康に來り、
 光宅寺に於て講じたもので、これは『法華』の文を辿つて、一々解釋し
 たものである。『法華玄義』は、其の五十六歳の時、荊州玉泉寺で講じ
 たもので、『摩訶止観』は、其翌年、同所に於て講じたものだといふ。
 『玄義』は、『法華』の文々句々に辿らず、其の内容を、理論的に説明した
 もので、『摩訶止観』は、實際修行の方法を述べたものである。然し此
 等は、皆大師の口述を筆記し、弟子の章安大師が編纂したもので、

尊安大師、天台宗の祖師として、古來に於ける天台宗の如く、佛の如く、稱する。

法華物語

三

皆天台大師自身の執筆したものではないといふことである。天台以後、『法華』に關する著書、實に汗牛充棟も管ならずといへども、多くは、此の三大部について、或は廣げ、或は縮めたものに外ならぬのである。これ大師が、天台宗の大成者と言はるゝ所以で、天台宗といふ名稱も、勿論、大師居住の天台山から出たものである。大師の後に、また三大部に詳細の註を加へて、大に之を發揚したものは、唐の中頃の人で湛然といふ人である。其の居所によつて荆溪尊者とも呼び、妙樂大師といふ號もある。『立義』には『釋籤』、『文句』には『記』、『止觀』には『補行』といふを書き、三大部研究者はまた之を最後の證權とするのである。

日本の天台宗は、傳教大師最澄が傳へて之を比叡山に弘め、新天台法華宗の宗名を掲げたのが、始りであることは、人の知る所である。此の以前にも、『法華經』は早くから日本に渡つて居つたのであるから

太子の師は高麗の僧慧慈に流して光宅の亞

一宗開立の依憑を正依の經といふなり。

多少研究されたことは勿論であらうが、特に注意すべきは、彼の聖德太子の『法華經義疏』四卷で、これは『維摩』、『勝鬘』二經の義疏と共に、『三經疏』と稱せられ、日本で著述の最初のものであり、また隨つて法華研究の最初のものである。此の註は天台宗傳來以前のものであるから、天台宗の説と連絡はない、寧ろ光宅の説に基いて居るものゝ様である。傳教大師以後、日本で『法華』に關する著書の出でたるものもまた非常に多いけれども、概して天台、荆溪を出でないものと見て一々之を擧ぐるの煩を避ける。

但しこゝに最も注意を促さねばならぬことは、日蓮上人のことである。凡そ佛教中で、『法華經』を正所依とし、之によつて宗旨を立て、居るものは、天台宗と日蓮宗の二つである。日蓮上人も、元來は天台宗から出た人であるが、然し『法華經』に對する見解が、全く天台宗と立場を異にして居る。之を詳に説明するのは容易でないけれ共、

附説

三

一言にして言へば、天台宗では、迹門から本門を開顯して行く順序によるので、理論から事實に進み、原因から結果に辿つて行くといふ組織である。然るに日蓮宗は之に反して、本門から迹門を眺め、實際から理論を證し、結果から原因を解釋して行く組み立てがある。故に天台宗では、迹門本門と順に行くのであるが、日蓮宗は、本門迹門と逆に行くのである。之を簡單に或は天台は迹面本裏、日蓮は本面迹裏などともいふのである。

天台は、迹門を面とするから、哲學的理論を説く。天地一乘の大道を、此の現象差別の世界の上に見んとし、現象即實在を論じ、宗教としては、妄想亂起の此の吾人の心の中に、根本一道の本體を見出さんとして、觀念をする。天台は理論的であると共に、また觀念教である。然るに日蓮は、本門を面とするのであるから、天地の現象皆これ妙法の當體で、吾人の身心、此のまゝ「妙法蓮華經」である。別

に理論説明も容るゝ必要なし、觀念修行を以て、妄心即ち中道と證する手段も入らぬ、問題は、此のまゝ、歩々の活動に、「法華」の力を實現して進むといふことである。身心を擧げて、妙法たる事實を證明する生活に入るといふことである。故に日蓮宗は、理論よりも事實、觀念よりも活動を主とするといふことになつて居る。理の妙法は天台である、事の妙法は日蓮である。口に「南無妙法蓮華經」を唱ふるのは、「法華」二經の、宇宙を該羅せる大道を、其のまゝ自己のものとする事實の行法である。唱題成佛は、此の意味の上に成り立つ。故に「法華經」を、一つの佛敎の道理を説いたものと見るのは、日蓮上人の見方ではない。之を以て、釋迦佛の當體活現の事實として親しく此の經典の上に、佛と相見、相接せんとするのが上人の見方である。「當體義鈔」に

所詮妙法蓮華、當體者信法華經、日蓮弟子檀那等、父母所生、肉身是也。

「法華經」の「法華經」に共
に「法華經」に取
る。

といひ、『法華經』に、
今の法華經の文字は皆生身の佛なり、我等は肉眼なれば文字と見
る也、たとへば俄鬼は恆河の水と見、天人は甘露と見る、水は一
なれども、果報にしたがて見るところ各別也、此法華經の文字は
盲目の者は不見之、肉眼は黒色と見る、二乗は虚空と見、菩薩は
種々の色と見、佛種純熟せる人は佛と見奉る。
とある、共に日蓮上人の『法華經』に對する見方を窺ふに足るべき文で
ある。
天台と日蓮の外に、佛教各宗の中で、現に『法華經』を讀誦する宗旨は
禪宗である。禪宗の『法華經』に對する見方は、畢竟妙法とは、我々本
來具有せる佛性、其のもの外にはないといふに歸着する。『法華』八
卷二十四品、縷々述べ來る所、そも何ぞといはれ、唯此の本來の佛
を見よといふにあるといふのである。道元禪師、『正法眼藏』の中に、

法華經の一
に與へたるす
の一章なり。

『法華轉法華』の一篇あり、此の旨を究明して殆んど餘蘊なしと言つて
よい。『辨道話』の最初にも、「諸佛如來、ともに妙法を單傳して、阿耨
菩提を證するに、最上無爲の妙術ありとあつて、此の單傳の妙法、
これ即ち本來の面目、端坐參禪を正門として、到るところのもの
あるといふ。白隱禪師は、
心の外に法華經なく、法華經の外に心なく、心の外に十界なく、
十界の外に法華經なし、是れ即ち決定至極の法理にて、愚老に限
らず、三世の如來も、十方の賢聖も、極處に到ては、皆々かくの
如く説き給ふ事にて、法華本文の大意は、大段これ等の趣を宣へ
給ひたる事にて、此の外にも八萬四千の法門を設け給ひたれども
皆權教の說にして、方便の間を出でず、至極に到ては、一切衆生
と、三世十方の如來と、山河大地と法華經と悉く不二同體なる法
理を諸法實相と説き給ひたる、是れ即ち佛道の大綱なり、大凡世

法華物語終

法華物語 三三
 尊一代頓漸秘密不定の法門ありて、無量の妙義をのべ給ひて、五千四十八卷の諸經あれども、其の中の至極の旨は、法華一部八卷の中に促り、法華一部六萬四千三百六十餘字の極意は、妙法蓮華經の五字に促り、妙法蓮華經の五字は、妙法の二字に促り、妙法の二字は、心の一字に歸す、云々
 禪宗流に『法華經』の要旨を説き盡したものと云ふべきであらう。此の外、眞言宗などで、また『法華經』に對する密教流の見方といふ様なこともあるが、然しこれは餘程特別な解釋であつて、こゝには述べ難いから、先づ此の邊で、終局といふことにして置かう。

法華物語索引

- ア
 阿若憍陳如 九七、七五
 阿羅漢 九
 阿難(阿羅) 九六
 阿僧祇 六
 阿耨多羅三藐三菩提 三
 阿菟樓陀 七
 阿難羅睺羅は下根 七
 阿私仙人 七
 惡人成佛 九
 惡口罵詈等 一〇三
 阿逸多 一四一
 阿彌陀經 一七二

- イ
 一念三千 三〇
 一大事因緣 三三
 一佛乘 三四
 一稱南無佛 三五
 一切衆生皆是吾子 四四
 一乘家 四
 一大寶處 七
 衣裏繫珠 七
 一切衆生悉有佛性 一〇一
 一切衆生喜見如來 一〇二
 醫兒服毒 一〇三
 一切衆生喜見菩薩 一〇二
 一身の犠牲 一八五
 一心稱名 二〇三
 ウ
 優婆塞優婆夷 一七

雲自在王佛
雲雷音王佛
烏瑟膩沙(肉髻に同じ)
雲雷音宿王華智如來

工、エ

緣覺(辟支佛)
閻浮那提金光如來
閻浮提
閻浮檀金
威音王如來

才

應身本佛

力

開示悟入

一五五

一五五

二二六

二二六

二二六

二二六

二二六

二二六

二二六

二

一五五

一五五

一〇四

一一一

一一一

一一一

一一一

一一一

九三三

一一一

一一一

ク

鳩摩羅什(什羅)
觀世音菩薩(觀自在)
觀無量壽經
光明如來
九會曼荼羅と十六王子
弘經の三軌
俱胝
具足千萬光相如來
久遠已來本化菩薩
觀行五品の位
廣長の舌相
觀世音の名義
觀音の變身
光照莊嚴相菩薩
光宅の法雲

一一二七

四

五九

七

八八

八八

一〇三

二八

一四九

一七

一七

二〇〇

二九

三七

索引

觀音玄義
觀音義疏

ケ

偈頌
華光如來
結伽跢座
化城の譬喻
下根授記
髻中明珠
現在の四信
現一切色身三昧
華德菩薩
玄奘三藏
荆溪尊者(竺樂大師に同じ)

三九

三九

三九

三九

三九

三九

三九

三九

三九

三九

三九

三九

三九

コ

三

劫(波劫) 五千の増上慢
今此三界皆是我有
五道
五時の判と信解品
五百由旬
護摩
五百授記
虚空會
五種法師
五種不男
五百塵點劫
劫火
五品弟子位と五十二位
五十展轉隨喜
後五百歲

九
三
四
五
番
宅
五
六
七
八
九
一〇
一一
一二
一三
一四
一五
一六
一七
一八
一九
二〇
二一
二二
二三
二四
二五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三四
三五
三六
三七
三八
三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇

サ

薩曇芬陀利經
三種法華内容の相違
三止三請
三界火宅の譬喩
三界無安
三車家と四車家
三草二木
三木一草
三周說法
三千大千世界
三因佛性
三千塵點劫
山海惠自在通王如來
三變土田
三十二相八十種好

一
二
三
四
五
六
七
八
九
一〇
一一
一二
一三
一四
一五
一六
一七
一八
一九
二〇
二一
二二
二三
二四
二五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三四
三五
三六
三七
三八
三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇

數々見擧出
三身の關係
三身即一
最初の一轉機
三昧
三毒
三十三身
三密相應
シ
正法華經
舍利弗
此土の六瑞
慈氏菩薩(彌勒)
始成正覺
四要品
聲聞

一四
一五
一六
一七
一八
一九
二〇
二一
二二
二三
二四
二五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三四
三五
三六
三七
三八
三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇

四諦
十二因緣
諸法實相
眞如
十如是
四佛章
正直捨方便
授記(別記)
舍利弗領解
上根授記
四車家
四聲聞領解
勝鬘經
十六王子
沙彌
十六王子八方成佛
種熟脫の三益

一
二
三
四
五
六
七
八
九
一〇
一一
一二
一三
一四
一五
一六
一七
一八
一九
二〇
二一
二二
二三
二四
二五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三四
三五
三六
三七
三八
三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇

事火婆羅門 七
 十大弟子 七
 序正流通三分 八
 十種供養 八
 舍利 八
 七寶莊嚴 八
 娑竭羅龍王 九
 娑婆 九
 四安樂行 一〇
 常樂我淨の四德 一〇
 自我偈 一〇
 常在靈鷲山 一一
 娑婆即寂光淨土 一一
 初隨喜と隨喜功德品 一二
 常精進菩薩 一五
 常不輟菩薩 一五
 正像末の三時 一六

攝受拆伏の二門 一六
 十種神力 一七
 十六品半の流通九品二半の正宗 一七
 宿王華菩薩 一八
 淨德王 一八
 淨華宿王智如來 一八
 釋迦多寶と妙音 一九
 七難消滅 一九
 十九說法 二〇
 釋迦多寶觀音一體 二〇
 持國天陀羅尼 二〇
 十羅刹女陀羅尼 二〇
 四天王 二〇
 唱題成佛の典據 二〇
 淨德夫人 二〇
 淨藏 二〇

淨眼 二七
 娑羅樹王佛 二八
 正定聚不定聚 二八
 釋迦普賢一體 二九
 慈恩大師(慈尊) 二九
 章安大師 二九

禪宗と法華經 二四
 増上慢 三
 彌累後の六品 一七

須菩提 九
 隨自意法門 五
 七

達摩笈多 三
 提婆品と普門品重頌 七
 太子の義疏 八
 太子三經疏 八
 大乘と小乘 一〇
 他土の六瑞 一六
 大白牛車 一六
 大般若經 一六
 多摩羅跋旃檀光如來 一六
 大通智勝如來 一六

世間相常住 三
 善智識 七
 善惡不二 九
 施無畏者 一〇
 聖德太子 一三

索引

踏七寶華如來 六
 多寶塔涌出 六
 大樂說菩薩 六
 多寶如來 六
 提婆品と異譯法華經 九
 提婆達多 九
 第十神力 九
 茶毘 一五
 陀羅尼 一八
 智法護(佛陀跋陀羅) 三
 智者大師(天台大師) 八
 錠光如來 八
 長行 一五
 重頌 一五
 長者窮子の譬喩 一五

チ

二〇 一八 一五 九 九 六 六 六
 八五 二七 二七
 一五 一五 三三
 二〇 一五 一五 三三
 四 三 三 三 三

中根授記 八
 智積菩薩 九
 畜類成佛 一〇
 地の震裂 一三

テ

添品法華經 三
 天台大師(智者大師) 三
 天台の三大部 三
 傳教大師 三九

ト

得大勢至菩薩(勢至) 二二

ナ

南無 一五

二〇 一八 一五 九 九 六 六 六
 八五 二七 二七
 一五 一五 三三
 二〇 一五 一五 三三
 四 三 三 三 三

ニ

二十八品本と二十七品本 七
 日月燈明佛 八
 二乗轉教 八
 如來の使 八
 如來現在猶多怨嫉 八
 如來全身舍利 八
 女身成佛 八
 二種の布施 一〇
 日蓮上人と不輕品 一〇
 日月淨明德如來 一八
 肉髻(肉髻) 一八
 耳根圓通 二〇
 日蓮宗と天台宗 二二
 日蓮上人の法華經觀 二三

索引

ネ

然燈佛 一九
 涅槃經 二五
 涅槃 二五
 念彼觀音力 二五

ハ

般若 二六
 方便 二六
 八歳の龍女 一〇
 跋陀婆羅 一五
 婆羅門教徒感化 二五
 白隱禪師の法華經觀 二五

ヒ

白毫相 二六

二〇 一八 一五 九 九 六 六 六
 八五 二七 二七
 一五 一五 三三
 二〇 一五 一五 三三
 四 三 三 三 三

比丘比丘尼 一七
辟支佛(釋尊に同じ) 二二
毘沙門天陀羅尼 二二

フ

佛陀跋陀羅(竺法護に同じ) 四
佛心者大慈悲是也 四
宮樓那彌多羅尼子 四
普明如來 五
分身召集 九
不輕品と勸持品 一〇
佛の三身 一〇
補處の菩薩 一五
普門示現 一七
普賢菩薩 一九
普賢陀羅尼 二二

變成男子

ホ

法華の翻譯 一
法華會上列衆 九
菩薩(菩薩摩訶薩) 一一〇
法華觀智儀軌 三
本生 三〇
本門迹門 三三
法華玄贊 四三
菩提樹 四六
梵天 四七
法華會座羅漢の數 五三
法明如來 五五
寶相如來 五七

寶塔建立 全

法華證明 全

法華身讀 全

本化菩薩地涌 一〇四

本門の四請四誠 一一

法身本佛 一九

報身本佛 二七

本門十二段の功德 二七

菩薩五十二位と分別功德 二八

本門授記 二九

本門流通の三品と法師品 三〇

本事 三六

法華三昧 一五

補陀落山 一九

寶威德上王佛 二〇

法華會座解散 二五

法華經義記 二七

法華經義疏 二七

マ

摩揭陀國 九
摩訶迦葉 九四
摩訶目犍連(蓮目) 九四
曼荼羅 九六
マイトレーヤ(彌勒に同じ) 一〇
摩訶迦旃延 四六
摩訶波闍波提(摩) 一〇
彌勒菩薩(マイトレーヤ、慈氏) 一一
名相如來 二〇
道の供養 二六

ム

無量義經 三
 無量義處三昧 四
 無問自說 六
 無一不成佛 七
 無常苦無我不淨 二五
 無生法忍 二五
 無盡意菩薩 二〇一
 妙法 一
 妙法華と正法華 四
 妙光菩薩 一八
 滅度 三三
 滅後の五品 一四
 妙音菩薩 一八

妙音の名義 一九
 妙音の卅五身 一九
 滅後得經の四法 三三
 妙樂大師(彌湊 湛然) 三〇

モ

目連(摩訶目犍 連に同じ) 二一九
 文殊菩薩 二一九
 文殊妙音相見 一九

ヤ

羊鹿牛の三車 四〇
 藥草の譬喻 五
 耶輸陀羅 一〇
 藥王菩薩陀羅尼 二二
 藥上菩薩 二九
 藥師三尊 二九

ユ

唯佛與佛 元
 唯一乘法 三
 由旬 六
 涌出の四上首 二二
 勇施菩薩陀羅尼 三三
 ラ
 羅什(鳩摩羅什 に同じ) 五
 羅睺羅(三) 五
 羅刹 二〇
 リ
 靈鷲山(善闍崛山 に同じ) 九
 靈山(同) 九
 龍宮 九
 索引 九

ロ

龍女成佛 九
 梁の三大法師 三七
 六種震動 二五
 六道 五
 六度 一四
 六即 一四
 六根清淨 一五
 六神通 二四
 ワ
 王舍城 九

法華物語索引終

明治四十五年七月十七日印 刷
明治四十五年七月廿三日發 兌

法華物語

定價 金八拾五錢

著作者 境 野 哲

發行者 伊 東 芳 次 郎

東京市神田區鍛冶町八番地

印刷者 小 川 德 三 郎

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 博 文 館 印 刷 所

東京市小石川區久堅町百八番地



發行所 東京市神田區
鍛冶町八番地

電話本局八八四番
振替東京一七一番

東 亞 堂 書 房

東亞堂出版圖書特約賣捌店

- 東京神田 東京堂書店
神田 武藏野書屋
神田 勉強文館
神田 崇文館
二松堂
至誠堂
北隆館
林平次郎
文林堂
神田 原書
前黑川書店
東海堂
日本 森江書店
同 日東堂書店
同 小石川

東亞堂發賣圖書目錄送郵券貳錢御速時贈呈す

加藤咄堂先生著 (東亞堂五週年紀念出版)

補修養論

(中央新聞批評) 第六百頁の大册の中に先づ修養の意... 養論の補修

努力論

一代の頭等幸田文學博士が人力と運命との關係より如何にして自己を革新向上せしむべきかを述べ

常識之基礎

(漢朝批評) 現代の人として必ず有するべき常識の基礎... 常識の基礎

加藤咄堂先生著

人格之養成

(中央新聞批評) 人とは何ぞに筆を起し古代民俗の人類観... 人格の養成

立志自修論

(やまと新聞批評) 本書は米國近代の大學者たり大教育家たり... 立志自修論

加藤咄堂先生著

自警錄

(やまと新聞批評) 書を分ちて自警、感想、觀察、編成、雑... 自警錄

堀内新泉先生著

人格と運命

大判洋装二百頁
正價八拾五錢
送價八拾錢

(萬朝報批評)人の社會に處する要訣より如何にして人格を高むべきか如何にして運命を造るべきかを説きたるもの。格として著者は由來小説を以て世に開きたる士なるか此種の文體にも自ら其丁寧なる筆力を見る(報知新聞批評)所謂世に處する新法を平易に説きたるものにて近來盛んなる人格の修養には好適の研究材料たり。

堀内新泉先生著

運命之改造

大判洋装二百廿頁
正價八拾六錢
送價八拾錢

(教育時論批評)我を處置するものは我也、運命は我れ自ら之を造る。何ぞ別に神あるを要せん底の見地よりして自家運命の改造すべきを説きたるものにして中々面白し。其説く處も實際に出で経験より來りしもの極めて多し演説の筆は、本書を讀まば必ずや大に悟る所あらんなり。

加藤咄堂先生著

補雄辯法

大判洋装二五〇頁
正價八拾七錢
送價八拾錢

(報知新聞批評)著者は居士傳家中第一流の雄辯家也本書は雄辯法を因明や西洋論理學や著者の経験から其雄辯法を因明や西洋論理學を以て中々面白し。其説く處も實際に出で経験より來りしもの極めて多し演説の筆は、本書を讀まば必ずや大に悟る所あらんなり。

弘道主筆足立栗園先生著

身心靈氣法

大判洋装約二百頁
正價八拾五錢
送價八拾錢

(讀賣新聞批評)靈氣の一本は古來聖賢の専ぶ所にして又事業家の大に努むる所なり。之れ無くんば人に何等の勇氣なけれはなり(報知新聞批評)精神に元氣精神と生命と身體の關係を説き第二編に於て靈氣と攝生第三編に於て氣力養成法を論じ第四編に於て身心靈氣の實驗として東西古今に亘り三十三家の所説を要約第五編として養生訓を載せ附録に飲食と喫煙と題して泰西十大家の實驗を掲ぐ身心靈氣の法を説く至れりと云ふべし。

東京血液療院 熊代彦太郎先生著

自活氣合術

大判洋装二百餘頁
正價八拾六錢
送價八拾錢

事の成ると成らざるとは一に當事者が氣合の強弱に關す。氣合充實し、元氣旺盛なる時は百病通達し鬼神も之を避く。若夫れ應對、折衝、交際、實業、軍事、學術、技藝、其他人事百般に應用せば、其効力の餘著なる實に驚嘆すべきものあらむ。古來偉人英雄が人の勝つるの秘事として密に活用し來れる斯術の蘊奥を研究して、以て氣力を増大せむと欲するの士は乞ふ速に本書を見よ。

弘道主筆足立栗園先生著

膽力之鍊養

大判洋装約二百頁
正價八拾五錢
送價八拾錢

夫れ大丈夫の立つて天下に事を爲さんと欲するや、其の最も肝要なるものは豪邁不屈の大膽力に非ずして何ぞや。高才あり、雄辯あり、博學あり、衆能ありと雖ども、膽力なくして將た何事をか成し得むや。古來偉人英雄の仰々すべき大事業の半面は、之れを膽力の活歴なりと稱すべし。決して過言にあらざる。膽力の鍊養、有志ある者の冷眼を視するを得べき所ならむや。之れ何人と雖必ず、本書を一讀すべき理由也。

後藤男爵閣下序・井上泰岳先生編

現名士の活動振り

大判洋装二六〇頁
正價八拾七錢
送價八拾錢

(萬朝報批評)桂首相、大隈首相、乃木將軍、海軍大臣、大隈代議士、坪内博士など、官界、軍界、政界、實業家、學者、文士、四十五名、家の日常生活を詳細に寫したるものなり(國民新聞批評)種々の意味種々な方面の名士の日常生活百餘項を列叙したるに、讀んで飽かぬ好讀物なり又好きな書也。

名士修養百話

大判洋装二百十頁
正價八拾六錢
送價八拾錢

修養は吾人が終生の一大事、何の時に至るも之れを廢すべからず。今安部磯雄、尾崎行雄、新渡戸洋子、大町桂月、鹽井雨村、江村海林、藤村、徳富蘇峰、佐治實、建部進、本多静六、木村、村松、大村、上野、山崎、山路、黒岩、周、加藤咄堂、三宅、諸等の諸名家が修養處世の金科玉條を叩きつけて、實上の成功秘訣を紹介す。品性修養、人格鍊養の無上訓誡たり。

加藤咄堂先生著

讀書法

大判洋装二九〇頁
正價九拾五錢
送價八拾五錢

(やまと新聞批評)讀書に關する一切の要件を詳説し附録に長篇の社會教育論を以てせり。此の書を成し、記憶を添補するに最も忠實なる著述と謂ふべき也(東京朝日新聞批評)讀者に簡明なる解決を與ふるに妙を得たる咄堂が自家多年の経験をもとめて、讀書の法を教へ、適切ならざる人、讀むべき多し、津に彷徨せる今の世の青年讀書子に、最も愉快にして最も親切なる解決を與へたり。

東京血液療院 熊代彦太郎先生著

深呼吸健康法

大判洋装約二百頁
正價八拾五錢
送價八拾錢

活潑の精神は、健康の身體に在り。深呼吸の如く、簡易にして、廉價にして、而かも、(1)身體の諸機能を強健ならしめ、(2)元氣を充實し、(3)記憶を旺盛にし、(4)思想を統一し、(5)精力を集中し、(6)膽氣を擴大する等の偉効ある、健康増進の妙法他にありや。且夫れ本書の價値多し、所以、所謂机上の空論に非ずして、百々著者が多年の實驗に準據せし點に在り。

心身健康會長 楡山鐵心先生著

頭腦記憶力増進法

大判洋装百三十頁
正價八拾四錢
送價八拾錢

ジョンソン博士曰く、記憶力は人間の根本的能力である。此能力なくんば到底有らざる。智力の運用を期待すること、出來ぬ。實に學問をする上にも、事業を成す上にも、記憶力程吾人の世に活躍する上にも、必要な能力はない。たゞ、記憶力は、最新秘訣を無視せざる。一大活書で、從來此種の著述中、替て其類を見ざる。痛切の卓説である。學生、實業家、軍人に問はず、是非速に參考せよ。

木村醫學士校閱・漆山又四郎先生著

腦力養成法

大判洋装百二十頁
正價八拾五錢
送價八拾錢

文明の競争は、智力の競争也。優勝劣敗の分る、所一に腦力の強弱如何に在り。腦力の養成、立憲精神に附すべき、或は即、腦神經衰弱、其諸種の腦症の治療法より、腦力及び記憶力増進の原理方法を詳叙せる者如何なる階級の人士を問はず、必ず、讀んで益を得べし。

加藤咄堂先生著

世態人情論

大判美本六頁 正價六 送費八

本書的確なる統計と、奇警なる觀察を以て、多趣有益なる如き快筆を以て、人心の驚異、世相の表裏等を、正面より、側面より、最も大膽に、最も精細に、現社會の忌憚なき解剖を試みたるもの、時に親を滅して、野馬を揮ひ、時を踏々として、處世の妙諦を語ること、眞に是れ、馬鹿を笑はせ、俗地理とも目すべき、平易に示されたる社會學とも稱すべし、生活難に備ふるの士、就職の方針に惑へるの青年等は、必ず本書を一讀せよ。

「弘道」主宰 足立栗園先生著

古英生活觀

中判美本約百廿頁 正價三 送費四

（北海タイムス批評）幾多の史書を採りて、古武士が平生其家を率ゐし日常生活の狀態一斑を觀察して、特筆に勤儉に窮なりといふ。

堀田文學士共著

圓滿生活論

中判洋裝二六〇頁 正價七 送費八

（東京日々新聞批評）圓滿生活は人生の理想なり、近來文明の向上と共に社會は益々複雑となり、人間の欲望は愈々多くなり、圓滿生活を去ること一日と遠からんとす。本書の衝止める決して徒爾ならざるべきなり。

福澤桃介君著

富の成功附株式成功策

大判洋裝壹七〇頁 正價五 送費六

（報知新聞批評）在來の成功致富を説く者に異り著者一流の露骨なる成功秘訣を語る所興味甚大なり、殊に其經濟的用心ある、猪突主義は最も味ふ可き一家言にして、附録株式成功談亦、讀誦す可し、近來の快著也。

金々先生著

致富儲けばなし

大判洋裝壹四〇頁 正價四 送費六

（報知新聞批評）どりとや、儲蓄を初めやうと面白可笑しく説出す當流金儲傳授、是を讀んで金儲の出來ない人は福の神にもどりケンにも見放された人なる可し。

松波法學博士序・原田定造先生著

手形取引の顧問

大判美本壹九〇頁 正價八 送費八

本書は近來手形の取引が益々煩雜を加ふるに隨ひ往々複雑な法律上の手續を要する點が、意外の奇蹟を被る者多きを憂ひ、手形法に精通せる原田先生が、約束手形、約束手形、小切手、國際手形等の性質、形式、受授の手續等を詳細に説明して、且つ附するに「法律用語の解釋」を以てせられたるもので、松波博士が實に「問答體」に依りて手形に關する法規の一般を平易に説明し、讀者をして直ちに其知らんとするを得せしむるは本書の特色なり」と賞せられたる實業家必讀の良書である。

文學士勝屋錦村先生譯

社會主義が實行されたら

大判洋裝二二〇頁 正價六 送費六

（大阪毎日新聞批評）本書は社會主義者の理想とする世界は、一箇の夢想に過ぎずとなし、之を實現したる時、社會に斯の如き惡結果を生ず可しとの趣旨を、労働者の家庭を背景にして面白く書かれたる、獨逸の代議士リヒター氏の著る、進んで痛快なる讀物なりといふべし。

堀内新泉先生著

時間活用法

大判洋裝二二〇頁 正價六 送費八

（報知新聞批評）人生の如何に時間の價值大なるかより、時間を使用するの心得は、數十項目に分割して、丁寧深切に記述したり、時の費ふべきこと、時を浪費すべからざることを、如何に之を留めざるべし、之を悔りて行ふ者、時を浪費する者、其切實なる書の出るは喜ぶべし。（日本新聞批評）金を浪費せぬ日本人は、最も時間を浪費せぬ人は、殆ど無き、紀律の必要なる所以。

藤田日東先生著

獨學法

中判美本二二〇頁 正價四 送費四

現時の學校教育は、智能啓蒙に對する一般方法を授くるに過ぎず、讀者生存の活社會に立て、劣敗者たり老耆たる者、之に努めざるべけんや、本書は即ち此獨學法の新法を、讀者の必讀するべきもの、學生諸君は勿論、何人も、時を浪費せず、必讀せざる可からず。

加藤咄堂先生序・本多五陵先生著

健康朝起の勧め

中判美本壹五〇頁 正價三 送費四

（中央公論批評）生理的に精神的に朝の冷気に打たれて、體かなる太陽の光を呼吸することは、大なる益のあるものである、本書は其効用を並べ更に古來之れによつて、成功の基礎を築いた人並びにその遺訓を收めたものなり。

大場健兒先生著

どもり矯正の實驗

中判美本全一 正價四 送費四

（時事新報批評）著者自身が多年吃音者として、苦心し結果種種の研究を爲し、自己の吃音を全癒したる經驗によりて、吃音に對する感想及び最も簡單なる實驗上の吃音矯正法を叙したるもの、吃音者の参考とすべきなり。

安田操一先生著

禁煙の實驗

大判洋裝壹六〇頁 正價六 送費六

（東京日々新聞批評）著者が實踐を以て其の効果を試みし告白なり、經濟上及び衛生上より討究して其の効驗と害とを明らかに證明したるものなり。（萬朝報批評）酒は止められるが、煙草は止められぬといふ、人の言ふとなり、この書は具體的にその方法を説き、禁煙の爲し得らるるとして、且つ如何なる効果あるかを説けり。

山路愛山先生著

勝海舟

大阪毎日新聞批評 幕末の偉人海舟勝麟太郎先生の生涯を記せる書なり海舟先生幕末に生れ頑冥なる幕臣の間に國難に處し維新回天の大業を實現せし事蹟を愛山一流の筆にて縦横に叙説せり狂と呼ばれれど呼ばれし海舟の一生は一面に於て幕末の活歴史なり本傳能く其間の消息を傳ふ。

大判洋裝二六〇頁
正價九十九
送費八

山路愛山先生著

佐久間象山

中央新聞批評 象山は維新の志士にして三尺の童幼も知るの偉傑 愛山氏は史家にして文章を以て著る 此著者にして此偉傑を傳ふ蓋し近來の快著と謂ふべし 叙するところ「少年時代」「第一回遊學時代」「在郷中時勢の變化」「再度の遊學」「歸郷」「第三回の出府」「在國營居中の象山」「非命に斃るの八章に分ち、的確なる考證と明快なる史眼とを以て極めて詳細に詳傳せり。殊に口語文を以て綴りたるは低級の讀者にも適すべし。

大判洋裝二八〇頁
正價九十五
送費八

和前天華先生著

坂本龍馬

(東京日々新聞批評) 坂本龍馬は幕末の日本が産出したる第一流の偉人にして維新大業の中軸たる薩長連合はに彼と大西郷との默契によりて成ると稱せらる不幸中途に士に暗殺の厄に遭ひ其史料散佚して多く傳はらず本傳は土佐の士に聞き寺田屋に聞き維新史料を搜り、殊に手から龍馬を殺害したる今村信郎氏に聞き之を小説體の讀物に綴りたるものにて、發賣以來江湖の大歡迎を受け第五版を出せり。

大判洋裝四百頁
正價一四十二
送費十二

長谷場文部大臣閣下序文及長歌
福本日南先生序・伊藤痴遊先生著

西郷南洲

(場天覽)

大判美裝全三冊
正價編各九十五
終編一四十二
送費各冊八

三冊合本特製美本 正價三圓五十錢送費十六錢
(萬朝報批評) 痴遊が其辨舌の如く筆を驅りて南洲を見るが如く描き出だしたるもの、講談速記に非ず、島津家騒動より征長事件まで廿一章に分てり、これを讀めば用強らずしてしかも感化を受けること多し、福本日南の序と英國にて發見されし珍品たる南洲の紅頭と巻頭を飾り(雄辯批評) 大西郷傳を中心として日本歴史中最興味多き幕末史の側面を寫したるもの、傳の詳密を極めたる事、對話の巧妙なる事、宛然其人を其場に目睹するが如きは著者が多年演壇より得たる、縦横活殺の手腕によりて描かれたり、而して叙本文の巧妙なる事は更に驚くべし、鹿兒島櫻島、京都岩倉、江戸城等の記事殊に可なり朗々吟誦すべし、南洲の外編中の人物何れも活躍するが中にも勝安房、山内容堂、岩倉具視、等最もよく描かれたり、續編に於ける江戸城明渡の一節は、眞に敵も味方も一齊に手を拍つて讚嘆すべき所也、近時出版の英雄傳中最特色あるもの也、夏日綠蔭の下之れを播かば暑を忘るべき也、好著也、快著也。

林逵信大臣閣下題字・加藤咄堂先生序
伊藤痴遊先生著

陸奥宗光

(萬朝報批評) 伊達小二郎の昔より「かみそり大臣」の當時に至る一代の奇行偉勳を叙す、麗姿、嬌舌、其間を點綴し、怪男子の面目は怪男子の筆によつて頗る活躍せり。

大判洋裝各一冊
正價各九十五
送費各八

藤田長江先生編

福澤翁言行錄

本傳は我が新文明の一大恩人として最も光彩ある生涯を有せし平民的大偉人福澤翁の敬慕すべき言行を録してその獨立自尊主義、實學主義、常識哲學を鼓吹せしもの人格修養の活模範たり。

大判洋裝全一冊
正價四十五
送費四

伊藤痴遊先生著

傑傳

(日本及日本人批評) 頭山滿、桂小五郎、星亨、中江兆民、中井權洲其他の豪傑奇人の逸話奇聞を小説體に書き綴りたるもの、津々たる興味、眼前其人を躍如たらしむ。消閑の好書たるのみならず、青年子弟の修養にも資するに足らん。

箱入美裝各一冊
正價各一
送費各八

伊藤痴遊先生著

後の西郷南洲

(つもと新聞批評) 著者更に滿腔の熱心を凝して以て此の編を成す。餘は益々佳境に入り、筆飛び墨舞ふの趣あり、谷將軍の持久の力に富める、桐野傑原の猛烈奮る可からざる、村田別府の智略縱横なる、其間において雄然として雄大な南洲翁の面目心事、殊に歴々として紙上に躍動し、波瀾萬丈、悲壯淋漓たるものあり、且つ最も複雑紛糾なる記録と傳説とを考取捨して、力めて公平なる見地に立て官薩兩軍の事情を明かにしたる、著者の用意と其勢も亦實に多とせざる可からず。

大判洋裝三九〇頁
正價一四廿
送費八

伊藤痴遊先生著

西郷南洲外篇

南洲翁と相擁し一首の和歌に幼子の赤誠を止めて、薩摩の瀬戸に身を沈めたる幾箇月照を中心とし、南洲翁の苦衷の維新活動の一大裏面等を著者獨特の快筆を以て直寫せるもの、讀神愈ひ、鬼哭するの思ひあり、南洲翁の大人格に服せらるる士は、又其別頭同志たる月照を知ることを忘る勿れ。

中判美本三七〇頁
正價六十一
送費八

白田有楠先生著

西郷南洲言行錄

(毎日電報批評) 西郷隆盛は後世に照りて一大奇蹟なり彼が偉大なる生涯の出発點は本邦歴史中の大革命なる維新の風雲にして其趣味多き官行の終焉は薩摩軍人に依りて脚色されたる大悲劇即ち城山の自刃にありき此書は此偉人の生涯を縦横に寫して刺さらんとするもの、如く材料を凡く蒐集して傳言、行の分類に收め英雄の傳記として最も正確なるべきを得たりと云ふべくたゞに青年子弟の好讀物たるのみならず明治維新史の一面として世人の一讀すべき良書なり。

大判洋裝二一〇頁
正價六十一
送費八

黒法師先生著
世界の美人探検
大判美本四八〇頁
正価一十四圓四十銭
送費八圓

野口米次郎先生著
邦日本少女の米國日記
大判美本二八〇頁
正価七圓七十五銭
送費八圓

秋元蘆風先生著
シルレル詩集
袖珍美本一九〇頁
正価四圓一十銭
送費六圓

町田柳塘僊史著
訂漢詩講話
袖珍美本二五〇頁
正価五圓一十銭
送費六圓

文學博士幸田露伴先生著
説小はるさめ集
大判美本百七十頁
正価八圓七十五銭
送費八圓

沼田頌川先生註
二日物がたり
中判美本百十頁
正価四圓一十銭
送費四圓

秋元蘆風先生著
山口小太郎先生序・秋元蘆風先生著
鐘の歌評釋
大判美裝全一冊
正価七圓一十銭
送費四圓

志賀華仙先生著
和歌作法
中判美本一三〇頁
正価四圓一十銭
送費四圓

佐藤仁之助先生著
新百人一首通解
寸珍美本百二十頁
正価二圓一十銭
送費二圓

戸川秋骨先生著
英文學講話
中判美本一五〇頁
正価三圓一十銭
送費六圓

高濱蘆子先生編
新寫生文
中判美本二三〇頁
正価五圓一十銭
送費八圓

作文法講話
中判美本百十頁
正価四圓一十銭
送費四圓

町田柳塘僊史著
訂漢詩講話
袖珍美本二五〇頁
正価五圓一十銭
送費六圓

秋元蘆風先生著
シルレル詩集
袖珍美本一九〇頁
正価四圓一十銭
送費六圓

野口米次郎先生著
邦日本少女の米國日記
大判美本二八〇頁
正価七圓七十五銭
送費八圓

黒法師先生著
世界の美人探検
大判美本四八〇頁
正価一十四圓四十銭
送費八圓

◎誰れが讀みても面白き、日本文學の傑作全集。

文學博士 幸田露伴先生 校訂解題

日本文藝叢書

▲立五寸、横三寸、振がな付 每冊三百頁内外 一冊貳拾錢均一 (送費一冊四錢、五冊送八錢)

本日藝文叢書刊目録

- (1) 馬曲 幸田 樞 說弓張月(上)
- (2) 文湖 幸田 樞 通俗三國志(一)
- (3) 馬曲 幸田 樞 說弓張月(中)
- (4) 一十返舎九著 幸田 樞 栗毛(前)
- (5) 著者不詳 幸田 樞 太平記(一)
- (6) 文湖 幸田 樞 通俗三國志(二)
- (7) 近松門作 幸田 樞 近松淨瑠璃佳作集(一)
- (8) 馬曲 幸田 樞 椿 說弓張月(下完)
- (9) 著者不詳 幸田 樞 太平記(二)
- (10) 一十返舎九著 幸田 樞 栗毛(後完)
- (11) 文湖 幸田 樞 通俗三國志(三)
- (12) 西井 鶴 西鶴佳作集(一)
- (13) 著者不詳 幸田 樞 太平記(三)
- (14) 馬曲 幸田 樞 俠客傳(上)
- (15) 其江 嶺 其嶺佳作集(合)
- (16) 文湖 幸田 樞 通俗三國志(四)
- (17) 著者不詳 幸田 樞 太平記(四)
- (18) 著者不詳 幸田 樞 一休諸國物語(全)
- (19) 馬曲 幸田 樞 俠客傳(中)
- (20) 三式 幸田 樞 浮世風呂(全)

本日藝文叢書刊目録

- (21) 文湖 幸田 樞 通俗三國志(五)
- (22) 馬曲 幸田 樞 俠客傳(下完)
- (23) 三式 幸田 樞 浮世床(全)
- (24) 著者不詳 幸田 樞 太平記(五完)
- (25) 文湖 幸田 樞 通俗三國志(六)
- (26) 著者不詳 幸田 樞 岡政談(全)
- (27) 文湖 幸田 樞 通俗三國志(七)
- (28) 編者不詳 幸田 樞 大岡政談(全)
- (29) 柳種 幸田 樞 邯鄲諸國物語(前)
- (30) 柳種 幸田 樞 邯鄲諸國物語(後完)
- (31) 柳種 幸田 樞 八笑人(全)
- (32) 文湖 幸田 樞 通俗三國志(八)
- (33) 馬曲 幸田 樞 馬琴佳作集(一)
- (34) 春爲 幸田 樞 いろは文庫(前)
- (35) 春爲 幸田 樞 いろは文庫(後完)
- (36) 近松門作 幸田 樞 近松淨瑠璃佳作集(二)
- (37) 著者不詳 幸田 樞 平家物語(前)
- (38) 著者不詳 幸田 樞 平家物語(後完)
- (39) 馬曲 幸田 樞 水滸傳(一)
- (40) 西井 鶴 西鶴佳作集(二)
- (41) 兼好法師 幸田 樞 水草紙・徒然草(合)
- (42) 馬曲 幸田 樞 水滸傳(二)
- (43) 著者不詳 幸田 樞 保元物語平治物語(合)
- (44) 柳種 幸田 樞 田舎源氏(一)
- (45) 柳種 幸田 樞 田舎源氏(二)
- (46) 柳種 幸田 樞 田舎源氏(三)
- (47) 柳種 幸田 樞 田舎源氏(四)
- (48) 馬曲 幸田 樞 水滸傳(四)
- (49) 秋上 幸田 樞 雨月物語(合)
- (50) 成田 著 幸田 樞 聽耳猿・疍癖談(合)

東京開成中學校 佐藤仁之助先生著
國語漢文科講師

漢學捷徑
正價 壹圓貳拾錢
送費 十錢

（やまと新聞批評）本書は分つ事十三、漢文と漢學とに關する一切の要綱を説いて親切な極む様に隨順に故事成語の解を収め更に卷末に索引を附せるが如き以て著者の用意の如何に深きかを知るに足るべく真に捷徑の名に負かず

國語漢文詳解

東京開成中學校 佐藤仁之助先生著
國語漢文科講師

全三冊各三百數十頁
正價 各四圓
送費 各八錢

東京開成中學校 佐藤仁之助先生著
國語漢文科講師

日本文法解義
正價 四圓十五錢
送費 六錢

本書は在來文法書の一讀直ちに要領を會得して實際の活用に至るもの鮮きを概し、日常教授上の實験に基き從來に類例なき新式を以て編纂せられたる其書にして、最も少なき時同と努力を以て、校入學試験問題並に教員檢定試験問題に附するに冬、一、解答の方法を示されれば受験準備の参考として、7、中學上級の補習用等として頗る便利なる書籍也。

東京開成中學校 佐藤仁之助先生著
國語漢文科講師

漢字異同辨及用法
正價 貳圓
送費 十錢

本書は同訓或は同音にして、而かも其の意義を異にせる漢字の異同を辨じ、且つ一々用例を示して、懇切に用法を説き以て机上の便覽に供したるものなれば、世の操觚の業に従へる諸君は勿論、日常作文の参考として萬人必携の寶典也。

國語異同辨附用法表

東京開成中學校 佐藤仁之助先生著
國語漢文科講師

寸珍美本百八十頁
正價 二圓
送費 十錢

東京開成中學校 佐藤仁之助先生著
國語漢文科講師

假字用法及動詞語尾
正價 六錢
送費 二錢

吾人が文章を作るに際し、一見非常に容易なるが如くにして、而かも實は却つて多大の困難を感ずるものは、夫れ所謂「かな遣ひ」に非ずや。本書は國語かな遣ひ、字音假字遣ひの全部に亘り、一々記憶し易き便法を示し、且つ誤り易き動詞語尾の變化及區別を詳述して、文章家并に國語研究者の絶大利便を策したる佐藤仁之助先生の最新一覽表也。

幸田露伴先生序 文學上沼波瓊音先生編
狂川風先生序

俳句講話
正價 四圓
送費 六錢

（中央公論批評）俳句なるもの、起因から説き初めてそれの情緒の傳はれる事やら季節の必要なるもの、夫れ所謂「持たせ」の事や。本書は國語かな遣ひ、字音假字遣ひの全部に亘り、一々記憶し易き便法を示し、且つ誤り易き動詞語尾の變化及區別を詳述して、文章家并に國語研究者の絶大利便を策したる佐藤仁之助先生の最新一覽表也。

文學士久保天隨先生序・文學士沼波瓊音先生編

俳句研究
正價 四圓
送費 六錢

（高朝批評）むづかしき理窟を列べずして著者が己れの俳歴を其儘に、初學者の参考としたるは面白し、俳句の評釋も字句に拘泥せずして其趣を盡して見るやうに説きたるは嬉し（大阪毎日新聞批評）冒頭先づ瓊音子自家の俳句研究の過程を語り次に古今名家の俳句を評釋し兼て俳句と他文藝との關係を論ぜり俳句入門の書として初學者に實益する所多し

文學士 沼波瓊音先生著

俳句階梯
正價 四圓
送費 十錢

（中央公論批評）俳句なるもの、起因から説き初めてそれの情緒の傳はれる事やら季節の必要なるもの、夫れ所謂「持たせ」の事や。本書は國語かな遣ひ、字音假字遣ひの全部に亘り、一々記憶し易き便法を示し、且つ誤り易き動詞語尾の變化及區別を詳述して、文章家并に國語研究者の絶大利便を策したる佐藤仁之助先生の最新一覽表也。

文學士 沼波瓊音先生著

俳句新選
正價 四圓
送費 十錢

（新小説批評）古選は會て俳諧珍本集中に編まれて大野西竹氏の校訂あり當時珍本中の珍本として持て囃されたるが後ちその姿を見る能はざりしに今又校訂者の多大なる苦心の結果ここに此の書に接するを得たるは俳諧研究者のみならず一般讀者の益を蒙る事甚大なるべくと思はる新選は無村太願太等の句散見するを以て興味なかに深くし更に少かるべし吾人は本書を推薦するに吝ならずものなり、裝釘の味を帯へる亦嬉し。

鳴雪、竹冷、瓊音、服部耕石君著

人生俳句集
正價 貳圓
送費 十錢

人を離れて、事なし。課題と云はず、贈答と云はず。俳人雅客が最も多く句作を徴せらるゝの類題は、夫れ人事句に非ずして何ぞや。本書は服部耕石先生が、博く古今の俳諧に關する珍秘を涉獵して、視察、用察、附答、寒暄、行樂、情景、感想、神祕、釋教、戀、無常等の諸門に亘り、凡そ人事に關する名吟佳句は洩らさず蒐集分類して、春夏秋冬の順序に排列せし俳人必携の一大寶篋也。

組育ヘラ下通信員イ、ジェ、ハリソン兵原著
法學士神崎勝光、飯田江東兩君共譯

日露の再戰

本書は將來日露兩國の再び東亞の天地に砲火を交すべき運命を有する所以を、歴史、地理、外交、經濟、人種問題等の諸方面より、縱横的に、警拔なる論議を試み、以て世界諸強國の權力論に及べる快著にして、原書發售以來、讀者の間、喧傳せられ、早くも數十萬部を賣盡せる事實に徴するも如何に其稀世の名著たるかを知るに足らむ。苟くも志ある同胞は他山の石として、速に本書を一讀せざるべからず。

兒玉陸軍大將遺墨 陸軍步兵大尉
山口陸軍少將遺墨 本間憲次郎君著

血戰

本書は、同胞の血と、肉と、砲火とを以て形られし、日露戰爭の猛烈な戦場を、旋乾轉坤の大活劇を、本間陸軍大將の、神眼の戦術眼を以て、精神に活寫せられたる、空前の劇戦の、神々しく、神々しく、日本男子必讀の大快著也。

日野陸軍少佐校閱。平山周芳著

飛行機圖説

東京日日新聞批評 本書は、飛行機の沿革、構造及材料、構造の構成、其の効率、推進機に關する諸般の事項を、明瞭なること詳細に飛行機に於て最も重要な發動機の構造に力点を注ぎたるもの如く、多少學術的智識を加味して、通俗力に之れを説明せる所甚だ要を得たり。卷末には、ライト、マン、ガ、ラス、ブレイク、アントワネット、グラーフ、テ、其他各飛行機の明細なる圖解を掲げ、本邦飛行界の泰斗日野少佐の序々に、之れを歐洲の新著に比するも、敢て遜色なきを信ず云々とある。又宜なるべし。

文學博士 富士川游先生序・澤田順次郎先生著
ドクトル 富士川游先生序・澤田順次郎先生著

男女の關係

本書は千古の一大疑問たる、男女兩性の差異を研究し、冷静的なる科學の立場より、兩性が亦、異なる性質を呈露し、冷静的なる科學の必要を唱道し、且つ男女各任務の分業、生殖の意義、色慾の苦毒等を説き、男女兩性を以て各其本分を自覺せしめ、以て獲取せる現時の社會風教に一大痛掃を加ふ、男女孰れたるを問はず、必ず一讀の要ある快著也。

丘。福來二博士序。薄井秀一先生著

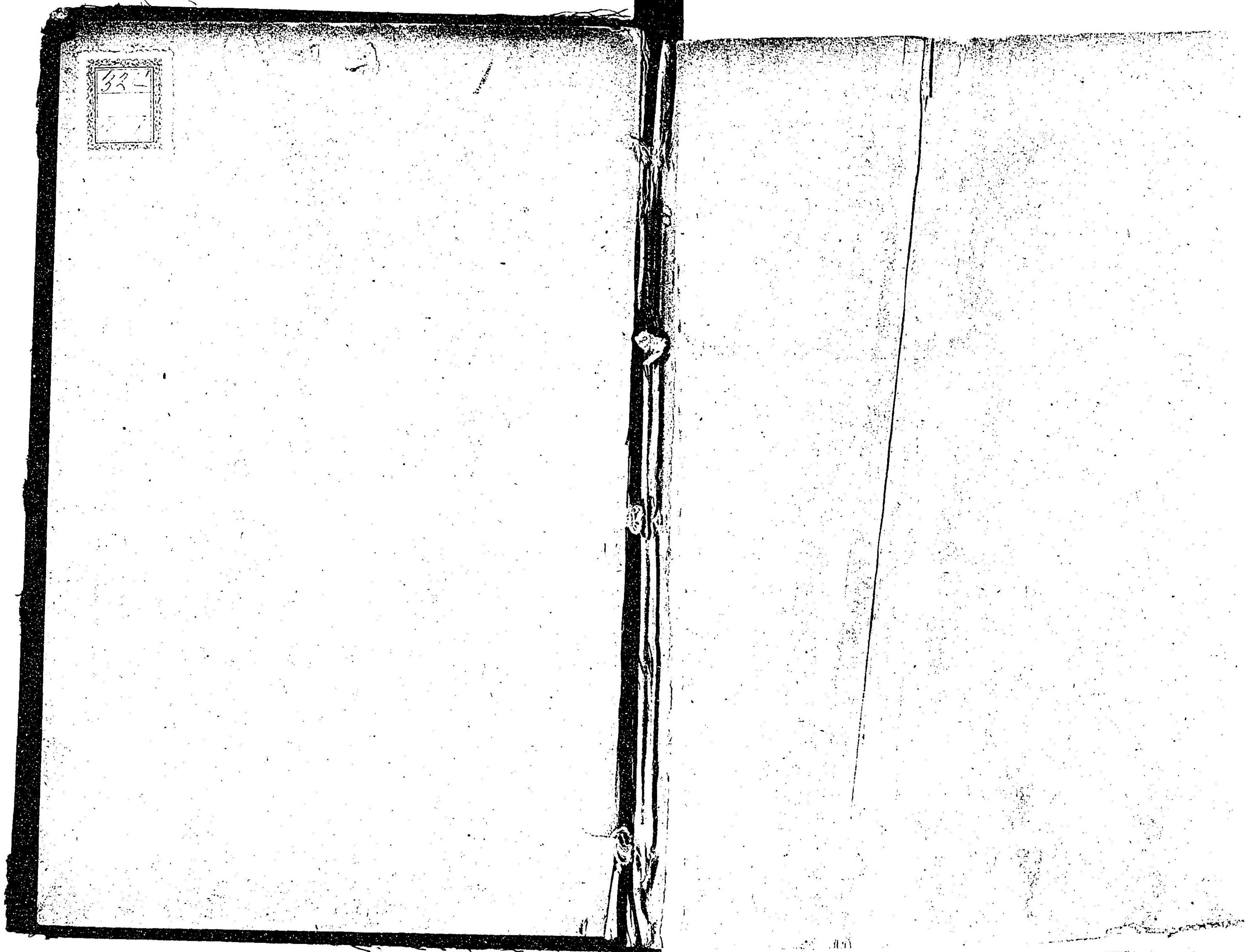
神通力の研究

世に不可思議の力あり能く聲なきを聴き、見ざるを察し、暗を未然に防ぎ、福運を將來に開拓す。爾して神通力と稱す。而かも此の不可思議の力たるは、實に我等人類に通有せる一大伏能なりと云ふに至つては、誰れか此奇妙の樞機を、獲得して以て鬼を役し、神を囑るの偉力を益しむることなし。何人に對するも極めて興味深き緊要文字！

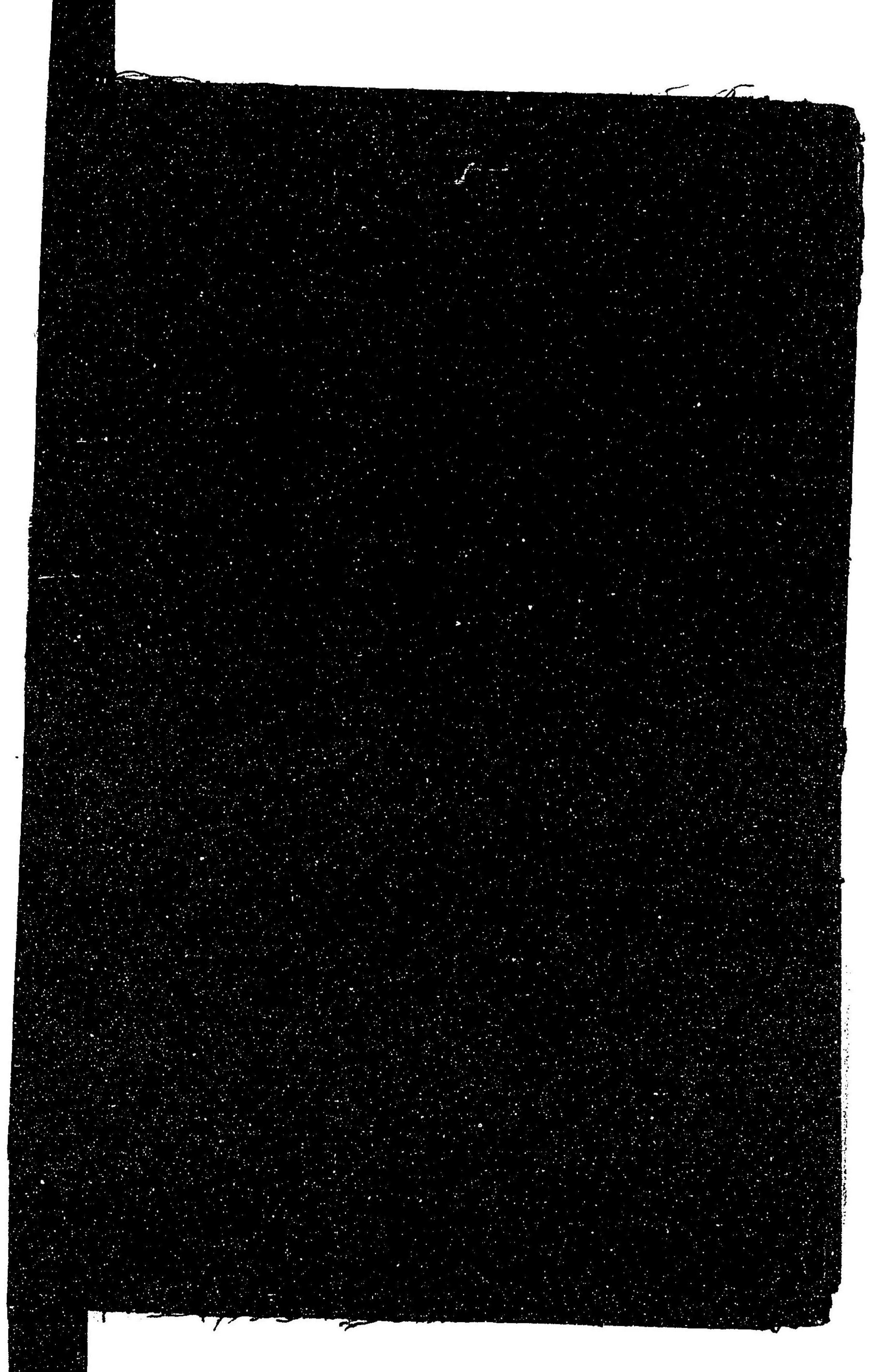
大日本催眠學會 小野福平先生著

催眠術治療精義

本書は、大日本催眠學會々長として、本邦催眠術研究者の先覺たる小野福平先生が、富饒なる學識と、多年の實驗とを基礎とし、博く東西の學識を參照して、筆を催眠術の原理とを基得べき諸種の疾病の病理、症候、經過、療法等を、明瞭に記し、經世家等の病も看過すべからざる其書也。



32



308

020140-000-9

324-308

法華物語

境野 黄洋/著

M45.7

ABH-0354



